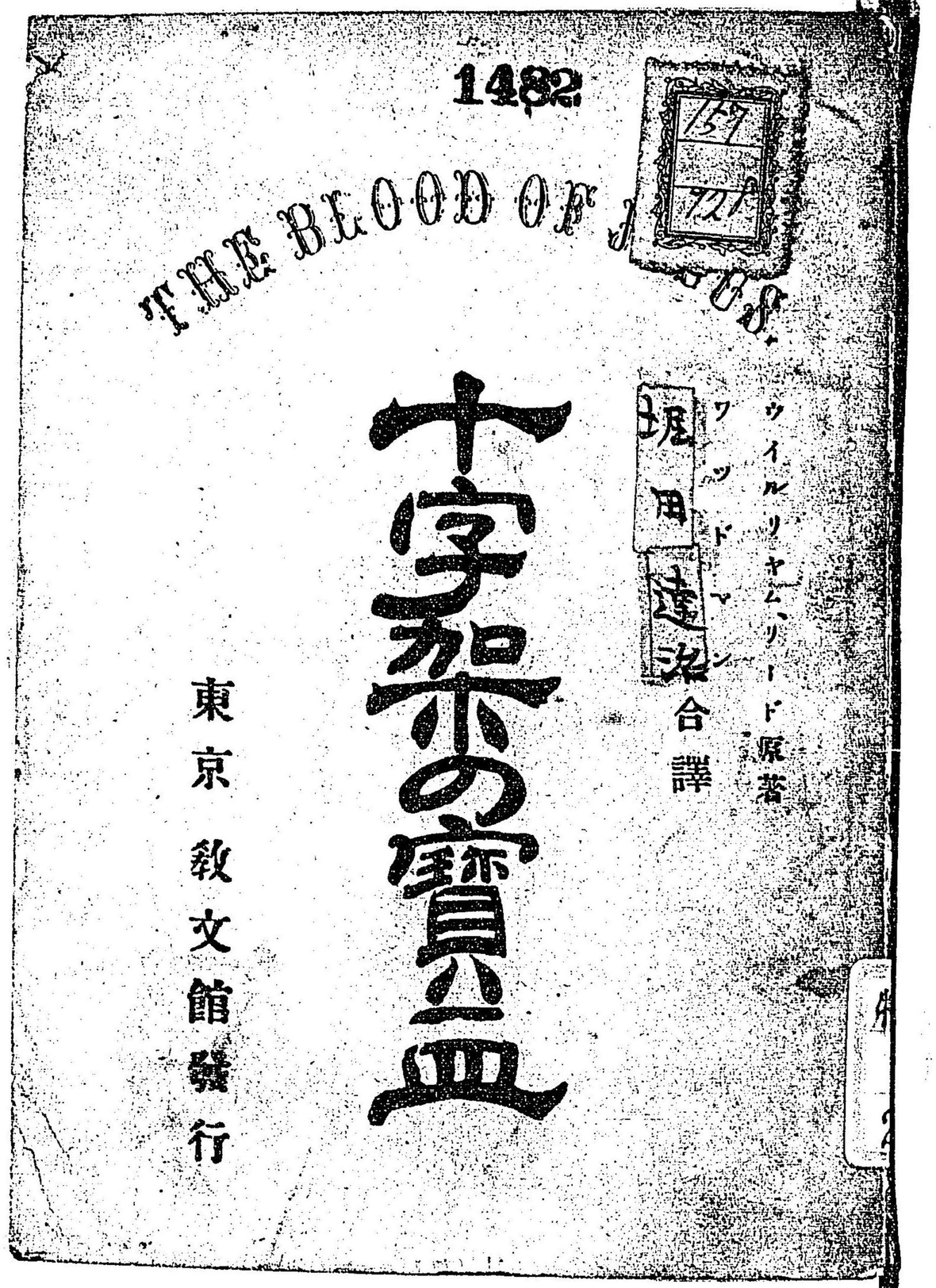

020722-000-5

特61-243

十字架の宝血

ウイルリヤム・リード／著

M30

ABI-0542

特61
243

十字架の寶血目次

緒論……一
第一章　基督の血と罪の赦……三四
第二章　基督の血は如何にして我儕の罪を去るや……四四
第三章　基督の血は我儕の平安と歡樂の源なり……五七
第四章
第五章

基督の血に關する書翰……六四
第六章……[illegible]
基督の血によつて給ふ救は神の賜なり……七〇
第七章……[illegible]
基督の血は神人の間を和くる唯一の道なり……八四
第八章……[illegible]
基督の血によれる更生……一〇二
第九章……[illegible]
基督の血を信ずるは救に必要なり……一一八
第十章……[illegible]

基督の血は信者の生命と平和なり……一二九
第十一章
基督の血を信するは成聖の基なり……一四二
第十二章
基督の血は福音の要素なり……一五三
第十三章
基督の血に關する聖靈の證明……一六三

第壹章　緒論

十字架の寶血

私は幼少の時より信神の心深く、凡ゆる人が現世に於て行す事は殘らず天の帳簿に記しありとの話を聽きましてより、何卒私も幸なる記事を多く作らんと思ひ、幾度となく祈を繰返して捧げましたが、十歳の頃聖書が神の言葉であるのを信ぜぬ人があるといふことを聞き、之は全く神より出たのが明でないからであらふと想像致しました、もし神が其心を

人間に示されたのなれば、必ず何人も之を疑れぬやうな方法を用られるに違ない、又神自らよしとしたまふなれば、蓋空に『我は主なり』との大文字を顯し之を見るものをして悉く信せしむる事も出來やう、又聖書が神より來りしものなれば其默示は誠に明で毫も之を疑れぬ事であらうのに何故ううされなかつたかと不思議に思ました、

然し此の幼稚な疑は定つた考と云ふものでもなく遂に或る夜の夢によつて急に消へ失せました、其夢の中で私は非常な暑氣に逢つたと思ふたのです、而して其熱は益烈しくなり、遂に天は二つに裂て炎々たる火焔を漲せましたが其

火焔の中に『我は主なり』との火の大なる文字が顯れましたのです、之によつて私は聖書の默示の確實なのを知りましたが、然し又此不思議な特徴も今迄信仰しなかつた人を益する事は出來ないし、又聖書が確かに神より出たものと知れたなら其等の人には永遠の不幸となるだろうと思ひました、

然し私は幼少の時には余り聖書の教理を教られませんでしたから、默示の教理特に三位一体の説に就ては多の疑がありました、基督と神とは一なるか二なるかなど云ふとは無論了りませんでした、

學校に居りました時には日々の禮拜の嚴肅で効力あるのを深く感じましたから、家に歸りし後は必ず家拜を守りたいと思ましたが余り遠慮して家に歸つても之を云ひ出さなかつた爲め所志を貫く事の出來なかつた事もありました、且つ信者の友人がありませんでしたから忠告をして呉れる者もなく導ひたり勵したりして呉れるものもなく、遂には宗教上の感想も段々薄らぎ、私の性質は丸で境遇の左右する所となりました、然し其中一の喜ぶべきは學校に居る間に正義の何たるかを敎られ、又退校の時に信者の一婦人より家に歸りし後の心得など敎られて吾身に責任のあ

るを知り漸々善と義と眞の方に進みました事です、私は讀書が好でありまして歴史や文學上の書籍を多く集て私の嗜好を滿しました、然し何とはなしに博く觀るのが私の目的でありましたから、あらゆる種類の書物を夜を日に繼で讀みました、只私の嫌ましたものは小説の如き一種の文學書類です、或時は非常に讀書に耽りまして十五歳の頃でありましたが安息日に敎會に行くのも止て靜に家に在て讀書をした程です、然し直に此事の善くないのを悟り止るやうに致しました、

數年の中に私は同じ町に住でをる實に熱心な傳道者と懇

意になりました、それからは只雄辨なる説教家の許に行て麗しい唱歌の樣な説教を聞くよりは寧ろ獨で神の恩惠の福音を聽ふと思ひました、元來信仰の心のある私ですから直に眞面目な熱心な信神者になりました、又智識を熱望する心を移して宗教の研究に傾けたのですから、聖書や宗教上の書を讀み、萬事を忘れて熱心に研究しました、プリートウードの基督傳などは尤も好んで讀んだものです、時としては之を讀んで夜の二時三時に至つた事もありましたが少しも疲れたとは思ひませんでした、今より見れば此の樣な境遇や私の後に受た困難等は皆私の輕薄な性質を練り

宗教上の務を負はしむるやうにする機械であつたと思ます、

講壇の教訓と自身の讀書とで程なく大概基督教の教理を了解しました、而して教理も知り實際の經驗もあり且つ善事を好む故に私は眞の信者であると思ひ、教會に連るは私の義務であると思ひました、入會の時にも大概の問は差問なく答たのです、然しもし汝は新に生れたりやとの問がありましたなら必ず困つたでしやう、然し兎に角入會を許されて一個の會友として晩餐の式にも列りました、日曜日には午前八時よりの祈禱會に列る爲め可成遠い處から通ひま

したが、此等は凡て行であります して私が非常な行には非常な報酬の與へられるものと思ふてをりました、又聖書の研究會にも出席しましたが非常によく考究の問題を調て出ましたから誰も其問題に關する智識に就ては私に及ぶものはありませんでした、尙深く聖書を研究し私の心の望を滿したいと云ふ考から註解書によつて研究を始めました、一の註解書を讀み盡せば又他の註解書を求め來りては勉强して調べ此の樣に種々の方法を以て聖書を研べるのを無上の幸福としてをりました、然し之は神を愛するからではなく只智識を得たいと云ふ望からでした、私は教會員に

なつた以前も又なつてから后も數年の間は罪と云ふ事を悟りませんでした、從て聖書を讀むのも重に私の智力を以て之を了解しやうと勉め私の良心や私の心に了解しやうとは致しませんでした、私は神を尋て見出ろうとしたので、神は靈性上に眞に欠乏を感じた者でなければ知るとの出來ぬと云ふのを知りませんでした、先つ謂はゝ私は自身で充分だと思ふただけ、眞理を見たばかりで、我が全く力なき罪人たるのを覺りませんでしたから、神よ我を救ひ玉へ我は亡んとすとの祈を心から祈る事は出來ませんでした、斯くするうちに私は段々と自分の宗教と自分の心に就て

不滿足になりましたけれども、また直接に基督に頼て安心を得やうとはせずに、正しく聖書を讀み正しく祈り正しく行つたら夫で幸になれるだらふと思ました、成程暫時の間は成功しました、隨分品行は嚴格であつた上に書物を讀なかつたり又は他の務を怠るときは良心に咎められますから、余程慎みました、午前に客來のある時は折角前より定てをゐた務の妨をされますので實に迷惑に思ました、又親しき友人に逢ふて談話に實の入る時には神の事などは全く忘れる事もありましたが後に至り夫を思出すと非常に後を取つたと思ひ奮勵して回復しやうと致しました、神を忘

れる事もあれば又懺悔苦痛の時もありました、兎に角已の思ふやうに宗教を行ふとしたのですから中々困難で不滿足でした、先づ行爲に欠點もなく、よく書物も讀み聖書の眞理を腦中に蓄へ日曜學校教師や雜書分配者として熱心に義務を盡してをる間は滿足でしたが、一でも義務を怠れば直ぐ苦痛を感じました、

私は眞實に良心に從ひ行も予盾する所がない爲め自身でも誠に敬虔な者と思ひ他人もろう思ひました、而して數年の間此の律法に縛られて泥土の中を彷徨てをりましたが我宗教上の考には根本から誤のあるのに氣が付きません

でした、私の心は滿足致しませんでした、良心も時々醒て眞の光を求めやうとしましたが然し義務さへ行へば善しからんとの考に壓せられてをりました、而して一方にはまだ神の前に義となつてをらないのですから、滿足は得られませんでした、只死せる行に賴てをるばかりで、義しき者の血によつて清められなければならぬのを知りませんでした、此の樣な過の中にをり靈の悟を得なかつたと十二年であります、特に一の過は今思ふて見るも誠に不幸な事でした、夫は私が自身の祈禱は神に捧ぐべき値がないと思つてありのまゝ惠の坐に出で神と交る事をせずに、他人の祈禱を

用て祈つたとです、時には心に浮び出る思のまゝに祈る事もありましたが公にあらたまつて神の前に出ますと我は値ないゆゑ神に向ては一言も述べられぬやうに感じ常に他人の祈を眞似て祈りました、値のない祈は巧に捧げなければ聽かれぬと思ひ、自ら祈れは或は余り長くならんかと恐れたのです、又此の如き誤た考をせなければ聖靈は私の弱を助けて共に祈られ私も信仰の眼を以て天を望み必ず優渥なる輔助を得たでしやう、然し私は聖靈によつて祈る代りに他人の言葉を以て祈りましたから、私の事情に適する事もありましたが適せぬ事も多くありました却て私と

神の間を遠くし惠の父と直接に親しく交られないやうにしたのです、

前に述し如く空しく永い年月を過し何の益もありませんでした、私は一体信神深く義務を守り行ふ方正でしたが、是は只自ら己の義を立てやうとしたので、神の敎の中心たる基督罪人を救ん爲め現世に來れりとの事實を無視してをりました然し憐恤に富る神は私を憐み聖靈の惠によつて其子を顯はし、死の蔭を更て朝となされました、福音の光が初て私の暗い心に輝たのは、私がルーテルの悔改の始末を記してある小冊子を讀でをつた時です、ルーテルは一日病

床に在て信仰ケ條の一節なる我は罪の赦を信ずとの句を聽せられてより幾度となく之を繰返せしに、彼は只ダビデの罪が赦さるゝとかペテロの罪が赦さるゝとか云ふのを信ずるのみならず彼自身の罪の赦さるゝのを感ずるやうになりました、此の眞理がルーテルの靈魂に罪の赦と平和を與ふる道となつたと云ふ話です、私は此話を讀で恰も天來の光に接したやうに覺へ罪の赦の確實なると各人の享け得らるゝ恩惠であるのを悟りました、けれどもまだ信仰が正當な方向に向て來たと云ふばかりで充分な滿足は得られませんでした、

其後間もなくロートメインの著した『信仰の生命』と云ふ書物を讀んで基督は最も弱ゐ信者も最も強き信者と同しく愛し且安全に守りたまふとの考を得ました、此の思想を得ても始は曙光を望む如く微でありましたが遂には中天に赫々たる榮ある光に沐浴するやうに感じました彼の大なる光の源は遂に私の靈魂を變化致しました、光をして暗黒を照さしめたる神は私の心を照しイエスキリストの裏に表れたる神の榮光を悟らしめ給ひました、夫より私は神が私と共に居り給ふのと私の靈魂を照した光の天より來りたるのを知りました、此に至て基督は私の思想の中心點となり基督は默示の中心なり實質なり全体なる事が了りました、彼は恰も鍵の樣で之を得るものはあらゆる宗教上の問題を解釋し得る事と思ひました、我心實に救主を喜びて受け邪念私慾と之に事ふるは全く惡きものとして退けました、基督は凡ての望を足しました、偖て此の如く靈の光を受け基督の愛に照さるゝ樣になりてより過去の苦き經歷を考へた時は唯驚く外はありませんでした、何故此程明に基督の充ちたれるのを示されてあるのに眞の救の道を見ることが出來なかつたらうと思て恥ました、基督によれば我儕に不足はありません、基督の力と我儕の働とが相まつて救

を來すのではありません之を成すものは唯基督の力ばかりです、是は日を見るよりも明白な眞理で基督は世の罪を負ひたまへる救主であります、私の一身も義務を果すとも心からの懺悔も救を成す上には誠に値の少ゐものであります、私は幾百度となく基督は失れたる者を尋て救んために世に來られしと云ふ事を聞きました又此眞理は聖書を一貫してをる教であると教へられましたが此時まで此の眞理を悟りませんでした、アヽ私の基督の榮光を見るに鈍かつたのは驚く外はありません基督の事を何程讀まして も心に掩ふ所があつて永ゐ間救主の榮光を認めなかつた

のは誠に悲しきことです、然し此の經驗を得ました後は何卒凡の人をして私が認た如く基督を悟らせたゐと云ふ情が頻りに起りましたが彼等が基督を見るの遲きには驚きました、又一時私は基督を明白に示し神は彼を人間の爲に智慧とし義とし聖とし救として立て給し事を教へ何人も之を疑はれぬ樣にするのは容易であるを思ひましたが、中々六ヶ敷き事です、

此の頃でしたが私は一の説教を聽聞しました、何卒益を得たゐと思ふて聞きましたが説教者は終に近ても何も私の靈を滿足させる事を云ふて呉れませんでした、然し其人は

羅馬書十章四節を繰返して『凡て信ずる者の義とせられん爲にキリストは律法の終となれり』と云ふて壇を下りました、此句は聖靈の力によつて深く私の心に止り私は一層新に神の光と生命と愛を感じました、夫より基督が我が代に律法の要求に應へられ給ふたのが明白に分りました、實に基督は毫毛の微に至るまで律法の要求に應へられたので誠に律法の終であります、律法の要求を悉く充して之を義とせらるゝ基礎とすると云ふ定則を破て新しき道を立られたのです、而して基督は我儕が自の力を以て律法の要求に應へ得たる間然する所なき義き者の如く生命に進むの

を希望されます、然し私が前に自ら身を縛てをつた時には此の如き考は起りませんでした、從て盲人が光を見られぬ如く自身の暗黒なる考により基督が我儕の爲成就したまふた仕事を我儕自ら成し遂んと思ふたのです、然し自ら律法の要求に應へやうとして勉てをりましたならたとへ永遠に勉ても成就せられなゐのは明かです、聖靈によつて眼を開かれた後に至つて曩に神でなければ何人をも義とせられぬのに自身の行で義者とならうなどゝ勉めたのを顧みれば實に恐しき事です『凡て信ずる者の義とせられん爲にキリストは律法の終となられ』ました故私は基督を信仰

さへ致せば自ら律法の要求に應へやうと勉めないでも事法の終を起程として進むことができます律法を欠なく行ふのが最後の目的ではありません、最に神に從ふものゝ最後の目的であらうと想像した事は實に夫から進むべき發足點であるのです、兎に角永き年月自ら義き者となり神に受入られんものと勉てをつたのに一瞬の間に基督を以て私の義の基とする事が出來てから私は殆と死たる者の中より生された如くに感しました』

以上述べ來つた話は著者自身の經驗ではありませんが、恰も此の書物が出來て緒論を書ふと思ふてをる時に聞いた

事で實によく宗教上の經驗を顯はしてをると思ます且つ眞に基督を信ずる人は必ず此の如き經驗を得らるゝと云ふのは、實に私が今此小冊子を公にする理由であります、此の樣な話は決して稀れなるものではありません、或は今日教會に在て自ら信神の心が厚と思ふてをつても『凡て信する者の義とせられん爲にキリスト律法の終となれり』と云ふ神の眞の恩を知らぬ人が多くありはせぬかと思ます、又律法と福音が混せられてをる處から求道者も義とせられ生命を獲るには何事か行はねばならぬと思ふようです、而して一方には數百千の人が聖靈によつて眞理を悟つてを

りますのを思へば、此の書の如きものを著して律法の外に神の人を義とし給ふとは顯はれ、イエス、キリストを信するに依て神は其義を凡ての信者に賜ふて區別なき事を述るのは極て必要と信じます、或人は罪人は基督の要求したまふとにはとても堪へられぬなどゝ申ますが之は基督と摩西とを混じた話で、基督の救とは摩西の律法を修正したものだと思ひ、恩と眞はイエス、キリストによりて來ると云ふのを忘れた誤た議論です、福音は決して要求や命令や威迫などではありません、教訓と約束であります、基督によつて罪人を赦すと云ふ喜ばしき音信です、此音信は頑固で義を

去る事の遠い罪深き人間に與へられたもので御坐ります、神が基督を以て墮落したアダムの子孫に賜つた福音の中には少しも命令はありません、信仰せよとか悔改めよと云ふのでも命令の意味ある事は皆律法から出たのです、福音は基督の寶血によつて罪人の爲に平和が購れたのを知らせる報知で又之を受くる樣に勸むるに過ないものです、福音は自由の音信を捕虜に與へ赦免の報告を死刑の宣告を受けた罪人に與へ、反逆人には平和を與へ死者には生命を與へ地獄の責に逢んとする者には救を與ふるものです、然し罪を赦すのは福音自身ではなく其中に示されたる基督

であります、から基督を受けなければなりません、基督は福音の中に在る者で昔時銅の蛇をさゝへし杆の如く福音は彼を信仰の眼の前にかゝげてをります、決して人の應せられないやうな要求をするものではありません、只神が自由に與へ給ふ恩を示し神の子を救主とする者に信仰の生命と榮光の望にかゝる凡の幸を得させるやうにするのです、神は救を得る代に何かを捧げよとは申されません、彼は大なる慈善家ですから我儕は乞食の如く立て恩を受取ればよいのです『其子を惜ずして我儕衆人の爲に之を付せる者はかれに併て萬物をも賜らぬ事がありましやうか』

神の恩の福音は又爾の心を基督に献よと云ふて強て責任を負はせるものではありません、時としては無理にも心を献ぐるのが福音の眞意であると思ふて求道者にも之を強る人がありますが之は誤りです、福音の眞髓は却て希伯來書十章にある『我儕イエスの血に由て其我儕の爲に開たる新しき生路より幔なる其肉躰を過り憚らずして至聖所に入る事を得、且神の家を理る大なる祭司あれば我儕誠實の心と疑を懷かざる信仰を保ちて近くべし』との句の中に顯れてをります、

爾の心を基督に献よと云ふのは福音よりは寧ろ律法です、

勿論献るのは正しき事で神も喜び給ふ所ですが、強て之をなさせるのは福音の眞意を遠く去るもので、眞の福音は基督を信じて自由にめぐまるゝ罪の赦の恵と彼が血を以て買れた凡ての幸福を蒙れよと云ふのです、斯の如く自由に信じてをれば我儕の心は直に基督のものとなります、我心が基督のものになるとて律法の命令に從ふからなるのではなく基督を愛するより自然になるのです、基督の愛が聖靈によりゆたかに濺ぐ時は我心は何となく動され心も身も凡ての物も皆彼に捧げなければ止まないやうに感するに至るものです、基督に心を献ぐるのは正ゐ事ですが第一

に彼の心を受けたものでなければ眞に其心を献る事は出來ません、

此書の希望は神の恵は律法の行によらず、只基督の血によるものであるのを顯す事です、人々を悔改めしめて基督の榮光を顯す事です、而して此の目的を達する方法と云ふのは只單純に聖書の眞理乃ち神の豐なる恵により我儕は立に救れ全く永遠に至るまで救るゝものなる事と、此の救につきては我儕何の効もなく、只基督が其血を以て購れ自由に給ふ賜を乞食の如く受くるより外なゐのを記述するのみです、隨分世には何事をか成し夫を以て神の救を買ん

とする人多き故に我儕は此の如き事の全く無益なるのを顯す爲に力を盡したゐと思ひます、又人の信仰には必ず判然たる起原があるものですが、其起原は全く自身の悲むべき忌むべき境遇にあるのを悟り、且つ基督は其靈を付す前に我事竟ぬと云ひ給ふた程に充分なる罪の供物となり神の御心を滿足せしめ給ふた故我儕は其恩により其血によりて購乃ち罪の赦を得らるゝなりと悟つた時です、彼木の上に懸りて我儕の罪を自ら身に負ひ給ふた故我儕は直に神に近けるのです神はイエスを立て信ずる者の挽回の祭物と爲給ふたのでありますから、彼を信ずる者は凡ての罪

を赦される筈です其子イエスキリストの血すべて罪より我儕を潔むとの證言があります、

基督の血は罪人が此世に於て神と和ぎうる基礎であり、救はれて天に至れる者の永遠の讃美の題であります、之によつて我儕は神に受けられ罪を赦され義とせられ神の家族の一人となり、聖と榮を得られるのであります、昔時幕屋の入口の壇の上には供物の血が流れてをつた通り今も償れた者の集れる教會の入口には主イエスキリストと十字架の血があります我儕の挽回の供物として基督が其血を流し給ふた事はクリスチャンの生涯の首途で其踐れたる血

の値を知るに至る經驗のいろはであります、

基督の血は我儕が此書に於て論ずる大主意で且唯一の問題であります聖靈此書をして讀者を救に導かしめ神の大能となさんと祈願に堪へません、

緒論を終るに先つて尙一つ申上たゐ事があります、其は此書を著にあたり全体著者自身で書ゐたなら容易で且愉快でもあつたのですが、特更エピスコパルプレスビテリアンバプテスト等の諸教會に屬する種々なる人の說を拔萃致しました、之は道を求むる方々が救の眞理が種々に顯るゝのを知る便宜と假令屬する宗派は異り教會は同じからず

とも聖靈によつて教へられたるクリスチャンは皆等しく罪人の救るゝ道は基督の血によるより外はないと信じてをるのを見る利益があると考へたからです、

我等は此書を公にするに當り再び聖靈の祝福此の書の上にあり、之を讀み道を求むる人の基督の血により至聖所に入り喜しき口を以て救の歌を唱ひ『願くば我儕を愛し其血を以て我儕の罪を洗潔め我儕をして王となし祭司となして其父の神に屬しむる者に榮光と權力世々窮なくあらんことをアーメン』と唱ひ得るに至ることを切に祈ります、

第二章

基督の血と罪の赦

愛の神は彼が罪人の爲に備へられた恩の事を記しだ書物の中に諸君の赦るべきことを御告になりました、其書に云ふ所によれば、誰でも罪と罰から救るゝのみならず、其救はるゝのは決して自らの行爲によるのではなく既に神が人々の爲に備へられた道によるので御坐りまして、實に我儕の世界に與へられた喜の書であります、之を信ずる人は乃ち救れるのです、誠に基督は我儕のなは罪人たる時我儕の爲に死たまいました、神は之によつて其愛を彰はし給ふ

のであります、神は其生たまへる獨子を賜ふほどに此世の人を愛し給ひました、此は凡て彼を信する者に亡るとなくして永生を受けしめん爲であります、而して基督は實に罪人の爲に死たまいました、『神罪を嚴ざる者を我儕の代に罪人となされました、是我儕をして彼に在て神の義となることを得しめん爲であります』我儕は單に神が基督を通して成れた喜しき音信を信ずれば乃ち基督に與し我儕を愛する者に居る事が出來るのであります、又『その恩の豐なるに由て彼にある我儕の血により贖すなはち罪の赦を得ると云ふことを自覺し其喜を味ふ事が出來ますから使徒の申まし

た通り他人に問て『人人兄弟よ此人に由て罪の赦の爾曹に傳れるを知れ』と申すことが出來ます、

何卒罪の赦はクリスチャンの生涯に入るの門であると云ふことを諸君の御心に深めらるゝやうに願ます、罪の赦は我儕人類の受けなければならない恩で今は現に受けられるのです、罪の赦を得ない人は永遠に滅びなければなりませんん、而して今直に之を得られない方は必ず安心がありませんん、過去の罪怨まで拭ひ去らるゝと云ふのは實に難有いとではありませんか、神は實に喜んで直に罪を赦して下されます、色々準備をせなければ赦ぬなどとは申されません、實

際罪を赦された樂しき經驗を持つ者は『もし己の罪を認はさば神は信實なる公義者なるが故に必ず我儕の罪を赦し諸の不義より我儕を潔むべし』と申してをります、而して此恩の基はイエスキリストの血であると申してをります、神は決してモ少し罪を悔た後でなければ赦さぬとか、日々夜々心を痛て祈禱をなし神の事を明に悟り困難と悲歎に年月を送つた後でなければ赦さぬとは申されません、却て基督が罪の爲に死れたのを知り、自ら罪人である故に彼を頼み信仰するなれば其人は基督の無量の功德により直に赦はれ神と完き和を樂む事が出來ます、此の如くして神は罪

人を義とせらるゝのです、神と我儕の和は何時でも唯神は十字架の血によつて平和をなすと云はれた事を信じさへすれば、自ら勉て罪を購ふ事も要らず自ら働く事もなく又永く待つ事もなくて得られるものです、只キリストイエスの購によつて神の恩をうけ功なくして義とせられるのです又其義は基督の寶血によつて正當な方法で得たものですから神も之を嘉して義としたまふのです、此くなれば人の凡て思ふ所に過る平安は自然と諸君の心中に湧き出で限なき泉の如くに溢れましやう、

罪の赦を得んとする者は一刻も空く過してはなりません聖靈は今日の日を過すなかれと申されます、諸君もし之を聽入れず、翌朝太陽の上るをも待たで罪の中に死れたなれば、何程罪を認め心を痛てをられたにせよ到底無限に滅るのを免れません、基督御自身も信せざるものは罪に定らるゝなりと申されました、加之諸君も罪の赦を得る外に自ら安心を得又神を喜ばせると云ふ道は御存じありますまい實に罪の赦は第一に肝要なものでありますから愛の神も又之を第一に諸君の前に供へられました、神はキリストに由て世を已に和がしめ其罪を赦したまふのであります、且

の諸君が凡ての恩を給ふ神に付て御考へなさる所が正當であるか否により又は罪の赦を心から信せらるゝか或は疑はるゝかによりて諸君の生命と性質には著しく異ゐた影響が及びます、人が社會に在て保つ位置は其人の幼少からの教育と練修の如何によつて定る通り、基督信者の位置は其人の信仰が凡て信ずる者は直に救ひ直に平和を與ふと云ふ神の恩の福音の眞理を基礎としてをるか否と云ふによつて實際定るのでありまず、諸君の位置乃ち現在のみならず、永遠に至る運命は今の時に決定せらるゝのです、夫故神が其子イエスキリストの性質と行によつて顯はされ

た恩に付て正統な考を有たれ、よき經驗を積るゝのは實に大切で御坐ります、且つ諸君が正しく神に事てをるや否や他人を導て成効すべきや否と云ふ事も先ず諸君が信者の生涯を始る時に明確に基督の血によつて救れたりと悟りしや否と云ふによつて分るのでありまず、もし自ら基督が諸君を愛し諸君の罪を拭ふて消されたと云ふのを確に知らなければどうして眞實に他人を導て基督の愛を悟らせる事が出來ましやう、古來偉大なる人の生涯を見れば皆基督の十字架を以て神を和ぐ唯一の道と信じ罪人の爲に死にしイエスキリストによつて義とせられ平安を得てをつ

たつのです、神の爲め人の爲め大なる事業をなす人も己先づ神に救されて永遠安全なりと信ずる人であります、例令ば彼のロバートマックケーンの如き人です、或人は彼の傳を記して彼は絶へず父なる神及び其子と交り靜に日を送れりと申ました、又自身で悔改の經歷を記した中に左の語があります、

天來の光に由り我心始て神の恩を見し時は律法の誡に心を打たれ、我は殆と恐れて死んとせり、我身には安全なる接處なければ義なるエホバの神を我救主と頼む外なし、

一度聖き御名を念じてより始の恐は順に散じ汚れし心の迷も消て我は大膽にも生命の源なる効なくして與へらるゝ泉に行きて水飲めり美なるエホバの神は我が萬事なり、

第三章

基督の血は如何にして我儕の罪を去る乎

世の罪を負ひ給ふ神の羔を見るには信仰を以て正しく見なければなりません、既に世の罪を取り去りたる救主を見よと云ふのではなく、現に世の罪を負ひ給ふ救主を見よと云ふのです、基督は神に撰れた世の罪を負ひ給ふ方です、自らも『人の子地にて罪を赦の權あり』『天のうち地の上の凡の權を我に賜れり』と申されました、基督は世界全体の罪を去る爲に權力を與へられたものですから實に唯一の凡て充ち足れる救主であります、全世界は神の前に罪を犯しましし

た然し何人でも此の罪の世に在るものが其の重荷に堪へ兼ね罪のまゝ神の羔の下に來り明に之を白狀し自らの苦痛も訴へ之を取去るやうに願ふなれば必ず基督は其罪を赦す力もあり又好んで赦したまふのが分ります、而して東の西より遠かる如く其罪を取り去らるゝ時には必ず感謝の念に充され喜んで

けがれなき主に　つみのれもに　おきてゞわれは
いてはまはし　貴きちしほに　わがけがれを
あともなきまで　君がきよめん

と唱ふでありましやう、

誰も過去の罪を自ら贖ふ事は出來ません、又何程從順になつたからとて榮光の嗣となる權は得られません、然るに基督は彼を唯一の救主と信じて任す者あれば好で其人の罪を去り自身の有てる權を與へて榮光の國に至らしむるのです、

或人は夫なれば兎に角基督に至て其惠を乞ふて見やう其上亡びたなら亡びた時の事としやうなどゝ申ますが、基督に頼るものは其樣な不安心を有つに及びません之は實に基督の充ち足れる罪の贖と汚なき穢なき聖き生涯に疑を挾む考です、

基督は自ら『われ神は其生たまへる獨子を給ふ程に世の人を愛したまへりゝは彼を信ずる者に亡ふる事なくして永生を受けしめんが爲なり』と申されました之は神の眞の言葉でありますから、疑ふてもし亡ぶるなら亡びた時などゝ云ふ必要はありません、榮ある福音に付て抱くべき正當な考は之です、神は其生たまへる獨子を下し罪人の爲に死しひる程世を愛し給ひ且つ亡ふべき罪人も彼を信ずる時は亡ふる事なくして永生を與へらるゝとの約束なれば我は其言葉を信ずべしと云ふのです、我儕の罪人たる時其子を與へ給ふた神は又自由に救罪、聖潔、恩寵、榮光等を與へ給ふ

に相違ありなせん、我もし其恩深き召に從ひキリストイエスに顯されたる愛に我靈を任せたならば亡ぶると云ふは決してあるまじき事にて神が其性質を變じて基督の血は我儕を罪より潔むとの約束を除き去る事の出來難い如く六ケ敷き事です、

父なる神はイエスを下し代て死なしむる程罪人を愛したまいました、基督は自ら生命を捨てゝ贖れた程罪人を愛したまいました、聖靈は罪人を愛されますから基督に顯れたる神の愛の記錄を作られ、又自ら世に來りて其愛を人の靈魂に示し救に導れます、嗚呼、自身の靈魂の救についても心配

せらるゝ方々は神の立て給ふた方法に從ひ萬事を基督に御任せなさい基督は聖き生涯を送て父に從ひ父を喜ばせましたのみならず、罪惡の當に受くべき罰と苦を受けて死れました諸君は此基督を信じらるゝなれば必ず罪の赦と平安と恩と聖とを與へられます、凡そ智慧に勝りたる神の愛は諸君の心の中に注て諸君は子供となりて神をアバ父よと呼ぶやうになりましやう、何卒我儕の爲に死して甦られた基督の限なき愛の力を感じて其榮光を顯すやうに生活したいものであります、

又罪人が救はるゝ道を明にし誰にても之を讀む人は一見

して其際き意味を悟り基督の下に走りて其助にすがる樣にする爲め茲に一の了解し易き例言を語りましやう、一日私が東北鐵道のアバーデン停車場に居た時にロンドンアバーデン間往復と云ふ記號のある車が場内に入て來ました、車室の戸は皆開てありまして驛夫は旅客の荷物を積込みました、そして數名の旅客は其車に乘りましたが彼等は改札所を出る時に其車を見て置たので只ロンドンと記してあるのを見て少しも躊躇せず其中に入り席に就きました、彼等は切符も買ひ旅行案内も持てをり正當な車に乗りましたから皆安心して少しも心配しません、一人も車を出

て走り廻りあはてゝ此の車に乗つてよいのかなどゝ尋るものもありませんでした、

又其滊車に乗る人員には制限があるから好ぬと申すものもありませんでした、多分市中の人口は八萬位でしたうが誰もロンドン行の車室の人員は二十人に限られたからとて不平は申ません、實際は其で充分なのです、此の停車場からは一日數回滊車が發しますが毎回一車室位でロンドン行の旅客には充分であると申す事です、現に私が見ました時も旅客一人で一室を占領してをるやうでした、此車室は全市中の人と其近傍の人の爲に備へられてあるのですけ

れども毎日其室内に來て坐を占むる人より外にはロンドンへ送らないのです、

神は其無限の智慧を以て我儕の世界の爲によく此の滊車に似たものを備へられました、此世に住む人で其恩の助を得やうと思ふものだけを宇宙の大都府なる天に送る爲に恩の滊車を設けられました、

夫故説教して人を導くと云ふのは乃ち誰でも志あるものは信仰によつて義とせらるゝと云ふ改札所を通ふつて天國行と記しある車室に入らせると云ふのです、効なき者にも自由に恩を賜ふと云ふの、ですから之を聞て私も得らるゝか知らんなどと考てをるには及びません、恰も鐵道會社は其人の品行は如何であらふと規則に從ふ人なれば其望む所に送ります、やうに今は救の時なりと云ふ其今と云ふ廣告された時間に恩のステーションに來ますれば救の滊車は既に備へられてあります、而して之に乘る爲に從ねばならぬ規則と云ふのは基督に固定を不殘まかせることです、此は自分で勘定の出來ぬものにとつては實に容易な又幸な方法ではありませんか、

今假りに或友人が財産を遺して死んだ故其を受取る爲に旅行じやうと思ふてステーションに來て滊車は將に立う

としてをるのに懐中には一文の金がなかつたとして御覽なさい、うして空しく切符發賣所の前に立てをる時に誰か來て貴君の渠車賃を拂ふて得さすると云ふたなら諸君は一も二もなく喜んで其に從はるゝでしやう恩のステーションに來た時も福音の敎に從て基督に車賃を拂ふてもらい安心して乘車し新き生命の道を通て限なき榮光に入る事が出來ると云ふのは實に幸な事ではありませんか、福音を悟て救はれるには基督が我罪を負給ふ事を知らなければなりません、十字架につけられた基督は福音の骨髓であり其華であります、パウロは深く基督の恩に感じた者

ですが其筆も其舌もイエスと云ふより麗しい名を表す事は出來ませんでした、彼の書た書翰の中にはイエスと云ふ名が五百回も出てをります、彼は一時も基督の事を考ずにはをられませんでしたから其心の善き庫から出るものは自然と其口や筆によつて顯れたのです、パウロは基督は彼の爲に神に立られて彼の智慧となり義となり聖となりました贖となりたまふたと信じたのです、故に說敎する時にも書翰を書くにもイエスキリストと彼の十字架に釘られし事の外は何をも知まじと意を決たと申ます、實に十字架の死の苦を受た基督を基とせぬ信仰は夢のやうなものです

此の夢路を辿つてをる人は早く醒るやうにしたいものです、

第四章

基督の血は我儕の平安と歡樂の源なり

聖靈が諸君の心を醒して諸君に神の權力にうむき反逆を計りて地獄に墮落すべき罪人は世に在て如何ばかり危險なるかと云ふのを知らせたならば、諸君は必ず心を痛て救るゝ爲には何を爲すべきやと云ふ問題を考らるゝでありましやう、一体何をしたならば罪人は神と和がれるでしやう、何を信じたなら救れるでしやう、然し神と和ぐ基礎となるものは自身の行ではありません、全能なる保證人はカルバリー山の上で事竟ぬと申されました、實にイエスは神が

人の罪を赦すに必要だと思れた事を悉くなしとげられましたから彼を救主とするのは永遠に向て堅固なる基礎を据るのであります、神の置き給し基礎の外に誰も基礎を置くことは出來ません而して此基礎は基督であります、諸君が靈魂の救を托すべきは此の基礎で決して諸君の成した事業や諸君の感情や思想ではありません、罪と其罰から救れるにも神と和ぐにも唯基督一人の功德による事で決して諸君の中にある聖靈の働によるのでもありません、故に苟にも自身の感情や確信や涙や悔改や所禱や勤務や決心などを以て平安の基と思てはなりません、先づ第一に基督を

受くるのです、決して色々準備が出來た後に受やうなどと思ふてはなりません、彼はアルファでありオメガであります、我儕の救にとつては萬事であります、多くありがちな誤ですが難行苦行して律法の誡を守る事を勤めたなら却てよく基督の意に適ふだらふなどゝ思ふてはなりません、諸君が基督に受けられるは今も後も何時も同じ事です、又罪を深く悟り得るまで待たうなどと思ふてはなりません、基督は確信に勝てをります、凡て世にある罪人よりも更に深く己の罪を悟たからとて少しも安全な事はありません、罪を悟るのは必要でありますが、其悟は何の安全も平和も與

へは致しません却て爭て苦痛を增すばかりです、危難の差迫てをる時に眠から醒るのは善い事ですが醒た事は危難から救ふのではありません、只危難の迫たのを覺へさせるばかりです、其の通り罪を悟るのは只己の靈魂が危險だと云ふのを知らせるばかりで外には何もありません、之は救にはなりません、只救主が必要なのを敎るばかりで救主の實際あるのを敎へは致しません、然し隨分多の人は深く罪を悟り律法を恐れ愼で守れば其で萬事よいと思ふて喜びます、モー深く罪を悟た非常に悲しく思ふた之れでよい安全なものだと思ます、然し其でよろしう御坐りますか、安全

でありますか、今迄睡てをつた船頭が急に目を醒して己の船が深淵の眞中で岩に當り今にも微塵に碎けやうとしてをるのを見たならばうれでもうよろしう御坐りましやうか、又夜中全家火になつて火焔に掩れてをる内に目を醒したならば、モー其人は安全でありましやうか、アーモー大丈夫だ火焔を見たと云ふてすましてをられましやうか、決して出來ますまい、此の樣にまだ達すべき所に達せないのに途中に憩ふて滿足してをる罪人が澤山あります、非常に心を痛て罪を悟りたいと思ひ之を悟れば滿足してしまふて、世の罪を負ふて十字架につかれた基督を見る事を致しま

せん、之はサタンが屢人を欺く方法であります神と和ぐのも罪を赦されるのも皆罪を償ふ、イエスの供物より來るのであります、

神の羔は世の罪を取り去ります、彼の十字架上の死は人の罪を贖ふ大なる供物であります、比類なき苦痛と忍耐は救世の事業を完成しました、彼の外に誰も此の如く大なる事業を企て成就したるものはありません、彼は我儕の供物、完全なる供物、完全なる贖にして我儕の平安と希望と歡樂の源であります、彼は我儕の罪を自ら其身に負ふて贖となられました我儕の勤行も我儕の祈禱も斷食も罪の確信も悔

改も正直なる生涯も慈善の行も信仰も或は我儕の德も我儕の罪を贖ふには足りません、此の贖は唯イエスです、イエス御自身です、イエスが木に懸り己の身に我儕の罪を負ひ給ふたのです、されば主イエス、キリストにより神と和ぐまでは決して怠つてはなりません、

第五章

基督の血に關する書翰

左に記すは博士ウキンスロウが或る死に頻せる青年の求に應じて死期の覺悟、義とせらるゝ事などにつきて書、れたる手紙の中より拔萃せしものなり

（前略）死期の覺悟と申候へば唯單純なる信仰を以て主イエスキリストに御任せなさるやう御勸め申候より外御坐なく候之は乃ち貴君の救るゝ道に御坐候永眠の準備は貴君の裏には無之基督の裏にあるものにて彼の血に洗れ其義を求たる者は神の前に出で靈なる全き自由なる者とし

て受容らるゝ事に御坐候罪人の首をも救ふ道は基督の裏に全備完成致しをり候へば何卒御自身の上に眼を止められず基督を御覽ある樣に願上候自ら準備を整へて死に當らんなどとの御考は必ず御無用に御坐候たとへ貴君は碎たる心をもち或は潔き心をもち或は祈の心を以て神の御前に出らるゝとも決して其にて受容るべきものには御坐なく候神は唯其子の贖によるる者を全きものとして受容られ候夫故小兒の如き信仰を以て基督の贖に任せられ候はゞ貴君の救るべきは疑なく候律法には咎められ自も欠點ありと思ふ憐なる罪人の義とせらるゝは唯基督の義に其

身を任すより外なく此くしてこそ義ともせられ死の準備も整ふたりと申されべくと存候自己を義となすを止めイエスなる救の町に逃れ候はゝ信仰の勝利を得て基督に在るものを罪する能はずと叫びて安全に救はるべくと存候基督に在れば乃罪を憎み心も潔められ信仰の心も起り又愛心も與へられ申候信仰を以て基督に觸れ基督に觸れられば如何なる罪人と雖も必ず救れ可申候たとへかすかなる信仰なりとも一度其眼を基督に轉ずる時は必ず靈魂の救を得べく候神は其子によつて來る者を受容れ其罪を悉く彼に負せて義人とし死する時は榮光の中に移さるゝ

事に御坐候基督は已を虛ふして來りし者は如何に値なき者にても決して拒れず候されば神の自由なる恩は必ず貴君を救れ金なく値なきも有の儘にて救るゝ事と存候終にパウロが獄吏に語りし言を御思出し被下度候乃ち主イエスキリストを信せよさらば爾救はるべしとの言に候過去の生涯は如何にありしとも又現在の有樣如何なりとも其に拘らず罪と穢れを潔る爲に開かれたる泉に投せらる樣願上候されば必ず洗れて雪よりも白くせらるゝ事と存候決して惡魔や不信仰の言に耳を傾けられ間敷候先づ第一に基督の足下に御身を投げられもし亡ふべきなれば其處

にて亡びんとの御覺悟有之度願上候否彼の足下に至れば決して亡ぶる事無之候基督は我に就る者は我必ず之を棄ずと御明言なされ候又主は我に來れとて懇切に御招き被下候へば何卒我れ主の下に行ん行て我が弱き腕を以て主と主の十字架にすがらんもし死すべくば主により主にすがりて死せんとの御答を申上られ候やう願上候此の信仰を以て此の如く行はせらるれば或は亡んかなどとの御心配は必ず無用に御坐候主によるものは死を恐るゝ必要無之候シメオンの如く『主よ今ろの言に從ひ安全に世をば逝せ給』と云ひ得ると存候何卒神の豐なる御恩により追て

天國に於て御面會致候節は御互に『曩に殺されし羔は讃美を受くべきものなり』とたゝへて基督の德を稱し度きものに御坐候(以下略)

第六章

基督の血によつて給ふ救は神の賜なり

著者は讀者諸君が何卒人間の救は唯基督の流されし血によつて來るものなることを御了解なさるやうに致したいと思まして色々の點から此大切な問題を調るのですから、今は此の救は神の恩であると云ふのを述べましやう、聖書には汝等恩に由て救を得と記してあります神の賜は我儕の主イエスキリストに於て賜る永生で御坐ります、神は其獨子を賜ひ彼を信する者には亡る事なくして永生を受けさせる程に世の人を愛し給ふのです、或英吉利の宗教家は申

しました、神の賜を給ふ方法は人の智慧では測られない神の賜は何か働た報酬として與へられるのではなくて唯愛を以て與られるのであつて愛に基してをる賜は實に立派で尊くあります、神が人を愛するのは明であります而して其賜は彼自の大なる如く大なるものです、乃ち其子を與へられたのであります、而して此の愛の賜を受くる我儕は信仰のみを以て受くべきものであります、信仰とは神の恩に任す事ですが實に尊い賜を受くるに適當な方法で御坐ります、此賜を受たものは罪も死も恐るゝに及ません、又此は全世界乃ち凡ての人に與られたのです、されば基督の言葉

は神は其子を唯メリーペテロ或はパウロのみに與へたのでなく全世界に與られたのだと云るゝのを能知らるゝ諸君は何故自ら之を信ぜられませんもし誰にても之は自分に關係はないと云ふて氣を付けないなれば其は取も直さず基督の言葉を僞とするのですから神の賜はペテロ或はパウロになられた如く世界の人々は誰にでも與られたのがよく分ります、私はどのやうな事があつても神を以て約束を守らない不實な者にする事は出來ません私は世界の一部で神に支配されてをるものです、然るに躊躇して賜を受取らないなれば之は神を以て不眞實な者として疑ふの

です、然し或は神は何故之を私のみに示されないだらう、もしうすれば私に關係する事が了るから信ずる事も出來ると云ふ人もありましやう、けれども神が此樣に一般の人に向て約束したまふのは深い理由があります、乃ち此く云はれてころ凡ての人が此の約束を受けられると思ふのであります、自ら退て賜を受ない人は何故之を受けないのか其理由を示さなければなりません、基督は我彼等を判かざれども彼等は其口によつて自ら判かるべしと申されました、然らば我等の救はるゝのは唯神の恩によるので又此賜を受くるは唯我儕の信仰によるので我儕の德や行や働に

よるのではありません、永生を得罪を逃れるのに必要な凡ての事は基督によつて與られた神の恩と愛の中に含れてをります、

今左に博士チャルマー氏が其友人に送つた手紙の中の一節を記しましやう、

私は救の福音は一方に於ける單純なる提出と一方に於ける單純なる受領より成るものなりと考し時程親しく道を味ひ滿足致したる事御坐なく候、殆ど此處に我子の血を以て供たる救あれば來りて受けよと云はれたる如くに覺へ申候救は決して我等の勤行に對する報酬には

無之我等の主なるイエスキリストを通して給ふ神の賜に御坐候又此は我儕に受取るべき價値ありて受るものには無之唯親切なる神の思召によるものに候時には賜の餘り洪大なるに驚き何か我身に此を受くべき德を積ねば受けられぬ如くに感じ申候へ共是は二種の誤解を釀すものに御坐候一は或る種類の信徒の信じをり候說にて我儕は何かの德を積ねば救を受くる權利なしと申す事に御坐候他は憂鬱なる一派の弊にて自の心を顧み自身の生涯を見るも神の慈愛を受くるに足るべき德なきを見て憂ひ悲むものに御坐候然し此等は兩ら救主を

見ずして自己を顧るより陷りたる誤に御坐候聖書には『地の極なるもろ〳〵の人よ我をあふぎのぞめ然ばすくはれん』と記しあり候人の子の木に懸られ候は彼を信する者に亡ふる事なくして永生を得しめん爲に御坐候間我儕のなすべきは唯供へられたる恩惠を受くるのみに御坐候神は之を受けよとて招かれ勸められ命せられ候我儕は値なく又潔からざる人は神を見能はぬ事に候へ共信仰さへあらば心配には及び不申候我儕は如何に勤むるも自ら聖く成り得るものには御坐なく候に基督は我儕に聖められ申候是は基督のめぐみたまふ賜の一に

して彼を信する者に與んと約束せられたるものに御坐候神は其子と共に萬物をも我儕に賜り我儕の中に住み且つあゆみ信仰によれる我儕の心をも聖め其律法を我儕の念に置きまた心に錄さんと約束なされ候尤も此等は基督を信仰するよりして來る結果に御坐候又彼を信仰するに至り候も我儕の働によるものには御坐なく候凡て事は其初を慎むべきものに御坐候が救を得るに第一に肝要なるは自由なる寛大なる何の條件も要らぬ神の恩を受入るべき事なるを御承知相成度候もし假に小生使者となりて天より來り貴君の宿所氏名を明記しあ

る招待狀を持來り候はゞ貴君は必ず少も疑ずして其手紙を受取らるゝ事と存候而して聖書は實に基督より貴君に與られたる招待狀に御坐候勿論其中には特別に貴君の宿所氏名は明に記しある譯には御坐なく候へ共凡て彼を信ずる者と云ひ又凡て我に來るものと記しあり候へば之れ明に貴君に宛たるものにて是より明白なる事は御坐なくと存候(以下畧)

ロンドンのトレールと申す人は亦次の如くに申ました、

神の恩は無限にて自由に與へられたる事と恩につける約束の無限なるを主張する爲に人より罵詈嘲弄せらるゝなれば余は甘じて之を受くべし、神の子人の形をとり罪の犧牲となり給ひ萬物を自由に給ふとの約束を成したまふたれば、人が榮光を得るに必要なる條件は皆既に充されたるなり、故に救を得るは恩によるなれど其約束を實際に行れしむるは人の信仰なり、信仰とは基督の犧牲と其充足れる德を信ずる心にして、信仰を以て基督の完全なる盛德を認むるものは必ず自己の心情の腐敗し

罪に汚れたるを認むべし、

然れども基督に於ける信仰は機械の如きものにして我儕を眞に義とするものは此信仰によりて受くる基督の

正義なり故に信仰は我儕をして自ら義たらしめ或は德を積ましむるものにあらず却て我儕の不能を認むるものなり

恩は自由なり、基督の最后の供物にして尤も價廉なり、金なく値なきものも之を得べし、之を買ふには全く價も條件も不用なり福音の市場には神の賜は自由に與へられ我儕は自由に之を取り之を受くると云ふの外に必要なる言葉なし我儕の如く律法の下に生れ宗教や文明の拘束を受て生長せし者は或る規則に從ひ或る條件を充さざれば救れざるべしと思ふは誠に當然にして神の恩に

よつて救るゝなれば義務を盡すも不必要にて我儕は全く墮落せる罪人なれば凡ての罪と愆と穢より金もなく値もなくして只愛の深き救主によりて救るべきものなりとの考は容易に出でざるなり

次に尙一個前世記の有名な思想家の申した所を記しましやう、

世に行るゝ法律上の用語の爲に福音の眞意を誤解せらるゝ事多し、人は或る條件を充せば救るべし其の行す所乃ち信仰して罪を悔ひ悲みて祈る等の行によつて救るべしと云はゞ余は此說を以て福音にあらずと斷言する

を憚らざるなり、而して余の説んと欲する所は人の心中に信仰、悔改、愛、其他の善を成し且神人の間を和ぐる基督なり、故に何人も我之を受くるの德なし我は頑固愚昧なるものなれば信する能はずとの申譯をなす能はず如何となれば基督は我儕の心中に善德を成し給へばなり今考ふべき問題は汝等自ら不德を補ひ然して後基督を容るゝやと云ふにあらず汝等の爲に不德を去り善を成し給ふ基督を受くるや否と云ふにあり、人は皆心の病になやむものなれば醫師に來て治療を求むるの必要ある罪ある者は基督に來る彼を其義となすべし、穢たるものは

彼に由て聖くなるべし自ら憐むべき不幸なる者なるを悟りたる者は基督に來りて其全き救を受くべし、心頑固ならば『我汝等の肉より石の如き心を除かん』と約束せられたる基督を受くべし彼によつて其固き心を碎れんと欲する者はよろしく來て其心を彼の手に委ぬべし、

第七章

基督の血は神人の間を和ぐる唯一の道なり

靈魂の救を得やうとして心を痛め道を求められる方の中には多數の基督信徒が聖靈を求むる祈をなすのを聞かるゝ處から己の第一の務も祈て聖靈を求むるのだと思ふ人があるかも知れませぬが、救の道は只神の遣し給ふたものを信ずるのであります、救を得やうと思ふ者は直に神の恩の御坐に行べきので決して他の事をしやうと思ふてはなりません、基督信徒が聖靈の感化を祈るのは神の事業の此の世に盛大になり悔改せる人を基督に導き罪人をして彼

等の不信と罪惡とを悟らしめん爲であります、元平和、罪の赦、聖潔、榮光の基となるものは只基督の血でありますから寧ろ人は神の羔を觀るのが第一の務であります、勿論基督を觀靈魂の救を得るには聖靈によるのが必要であり又誰でも救主の十字架に懸られたのを思へば聖靈の助を得たいと思ふでしやう、然し己が基督によつて義とせらるゝのを求むる前に聖靈によつて心の聖めらるゝのを求むるのは間違であります、又此の二の事を混合して一は此によつて求め他は彼によつて求むると云ふ樣にするのも聖書の教ではありません、我が神と和ぎ心を潔めらるゝのは只基

督によるより外に道はありません、救の源は基督であつて聖靈の役は我儕を導てカルバリーの山上にて事竟ぬと云はれた基督を覩させるやうにするのです、それですから聖書の何處を見ましても神の聖靈我儕を罪より潔むとは書てありませんが『其子イエスキリストの血すべて罪より我儕を潔む』と書てあります、夫故我儕の特になすべきは基督を以て救主となし豐なる恩により其血により贖乃ち罪の救を得ることです、聖書に『彼を接け其名を信せし者には權を賜て此を神の子となせり』と記してありますから少しも疑はいりません、我儕は子となる準備を充分して後神に來て

受容られ義とせられ基督によつて罪を赦されよと云はるゝのではありませんで直に基督に來て其恩によつて義とせられ靈の交をなして神の子となれと云はるゝのです、我儕は罪人でありながら義とせられ受容られ神の子とせられ神の子の性質と經驗を有ち又神の子として歩む事が出來ます、嗚呼世の罪に汚れた方々よ、先づカルバリー山上に我儕の罪の爲に血を流された基督を見て救の道のいろはから始めなければなりません、常に基督を望で自身の懺悔も決心も祈禱も讀書も凡て自ら考て罪を赦され或は救はるべき理由になると思ふ事を棄る、なれば、此時に眞の平和

を得『神の靈によりて事をなしキリストイエスに由て誇り肉体に恃ざる』者の一人となる事が出來ます、

救は唯基督の血によつて成る事を説明すには彼のイスラエル人がエジプトの奴隷の境遇から救れた時に其家の門に逾越の節の羔の血を塗りて救れたと云ふ事より著しい例はありません、門の血がイスラエルの平安を保つたのです殺滅者の目を免れて平和を保つに必要であつたのは只血を濺ぐと云ふだけでした、審判にあつて罪なしとせらるゝにはどうしても罪を贖ふだけの血が必要でありますから神は只之を求められました、神は決して我汝の家の門に

血と酵いれぬパンと苦菜とを見ば汝の家を逾越さんとは申されません、パンや苦菜は夫々役目があり値もありますけれども神の前に平和を得る基となる事は出來ません、抑神人の間を和す基は何であるかを簡單に且つ明白に悟るのは極て必要であります、時としては基督を信じても如何にして罪が赦さるゝか分らず不確に思ふ事もあります又赦を得るは只基督の血にのみ依るべきだと云ふのを知つてをつても知るばかりでは役に立ちません、悪魔も之を知てをりますが彼等は救れません唯必要なのは我儕は救れてをる、絶對的に全く永遠に救れてをると云ふのを知る

事なのです、半分救れて半分亡るとか半分義とせられて半分は罪の中にあるとか半分は生き半分は死し半分は神によつて生れ半分はうでないと云ふ樣な可笑な事はあるべき筈でありません、正當な有樣は只二よりありませんで我儕は其中何れかに居らねばなりません、

イスラエル人も半分は血を門に濺だ爲にかくまはれ、半分は殺滅者の危難にさらされてあつたのでありません、彼は血を濺だから夫で安全だと信じてをりました、或は安全になり得るかと思ひ又は安全になりたいと所つてをつたのでもありません、何故なれば神は『其血なんぢらが居るところの家にありては汝等のために記號とならん我血を見る時なんぢらを逾越すべし』と申されましたから彼は血を濺で其以上の事は神の證言に任してをつたのです、神は眞なりと云ふのを信任の基として神は其云ふ所を實行したまふと信じてをりました、此が彼に平安を與たのです彼は已に代て汚なき羔が死だから殺滅者も如何ともする事は出來ないと信じてをつたから悠然として靜に逾越の宴に列

つてをりました、當時もしイエスエル人に向て如何にして其樣に泰然としてをるかと尋たなれば何と答たでありましやう、私は羔の血によらなければ救れなゐのを知てをる

之は神の示された完全の道であるのも知てをり且つ其血は私の門の柱に濺であるのを知てをりますが然し何となく滿足でない安心がならぬ、之は充分に此血を重せぬ爲であらふか又は我先祖の神を充分愛せぬからであらふかなどと答へましたらふか、決してさうではありますまい、然し今日基督信徒に果して平和を保てをるかと尋ると多くは此の樣な曖昧な事を申してをります、彼等は基督の血の代に基督の血に關する自己の思想を專一にしてをります、其結果として自の行によつて救るゝ樣に考て、救は多く己等によるものとするのです、

然しイスラエル人の救れたのは血によるので血に關する彼等の思想によるのではありません、彼等の思想は深遠であつたにしろ淺薄であつたにしろ其は彼等の平和には關係がありません、彼等の救れたのは思想や感情によるのではありません、神は汝等血を見る時は我汝等を逾越さんとは申されませんで我血を見る時はと申されました、神の眼が門の血を認たと云ふ事實がイスラエル人に平和を與へたのです、彼等は家内にをりましたから或は自身で門の血を見る事が出來なかつたかも知れません然し神がそれを見られたと信じたから少しも心配致しませんでした、

今此話を以て罪人が平和を得る事を説明すれば甚だ明白です、基督は罪の爲に全き贖として其血を流し神の前に濺れた故に信者は之を以て神より凡の事定れりと云ふ證言を受けたと同樣に考る事が出來ます、此くして正義の要求は悉く應せられ罪は贖れましたから神の愛は基督の切り開かれた道を通して溢れ流れるでありましやたう

聖靈は此眞理を証し神が如何程基督の血を重んじたまふかと云ふのを示します、彼は罪人を導て十字架の全き働を見せ信ずる者の罪を去り義を得しむるのです、而して此信ずると云ふのも神が斯く云るゝから其を信ずるのです自ら

斯くしたら救れやうと感じて之を信ずるのではありません、

我儕は兎角平和の基を我儕の中に尋ね出さうとする傾のあるものです、又は基督が我儕の爲になされた事業よりは聖靈が我儕の中に爲す働を以て平和の基としやうと致しますが、之は誤です勿論聖靈の働は基督教の重要なる力でありますが然し其働は決して我儕の平和の基となるべきものではありません、平和を作たものは基督です聖書にも聖靈が我儕の平和の基であるとは教てありません、聖靈は基督を示し我儕をして彼を知り彼を慕ひ彼に義はるゝや

うにするものです、故に聖靈の助なければ我儕は基督を觀其敎を聽き樂んで其德を顯す事が出來ません、之は明白なる事で眞の正しき敎を信ずるクリスチャンは皆之を眞理と致します、然し聖靈は平和の基ではありません、又我儕の代表者となつて神の前に罪を贖ふものでもありません、彼は今日尙信者の靈の中に働き云ひ難きの哀を以て我儕と共に祈り我儕をして基督と一致せしむるやうに勤なすが、其目的は諸人をして基督の中に完全を得しめんとするので、正しき願、聖き望、清き情や靈の經驗を得させるやうに致しますのです、夫故我儕が完全になり基督と榮光の中に住

ふまでは其働は止みません、基督の事業は聖靈の働と全く屬つて最早完成してをるのです、其言に『我なんぢの榮を世に顯し爾の我に委し所の行は我これを爲せり』とあります、聖靈は今も尙其働が竟つたと云ふ事は出來ません、彼は過る千八百年の間基督の代官となつて其世で忠實に働きましたが今も尙多くの惡き勢力の中に在て働き神の民をして實際經驗の上より神の示したまふた標準に達せしむるやうに務てをります、其務は基督を示すので己を平和の基なりとて敎るのではありません、基督は我なんぢの榮を世にあらはし爾の我に委し所

の行は我これをなせりと申してありますが聖靈は基督の働によつて救れよと申てをるのです、罪を贖ふのは全く基督の力で聖靈の力ではありません、ヨハネも『其子イエスキリストの血すべて罪より我儕を潔む』と申てをります、我儕の裏に在てなす聖靈の働と我儕の爲になす基督の働とを區別するのは極て必要であります、此等を混じて考てをる間は確乎たる安心を得る事は六ケ敷う御坐ります、過越の例は此等の區別をよく平易に表してをります、イスラエル人の平和は酵いれぬパンや苦菜によらず羔の血によつて來たのです、又其血を以て罪の贖だと彼等が信じたか

ら救れたのではなく神が罪の贖になると認められたから救れたのです、此の樣に思ふ時は我儕の心は重荷ををろしたやうで誠に慰られます、神は自ら贖を立てゝ之を我儕罪人に示して我儕を助けられるのです、其贖の限なく貴きに比れば、我儕の思想感情は實に値のないものです、然るに神は我儕の罪に汚れてをるのも滿足して助け給ふと云ふなれば我儕は無論滿足せなければなりません、聖なる神が安じ給ふ所のものは我儕の良心は必ず安ずる事が出來ます愛する讀者諸君よ諸君は未だ基督に於て平和を得られぬなれば何卒此問題を深く考へられん事を望ます、諸君の平

和の基は平易な處にあります、神は基督の完全な事業を以て御滿足ですから諸君の平和の基は神の羔が濺れた血にあるので決して外のものにはありません、乃ち神が見て永遠變らぬ功德ありとし給ふ貴き血にあるのです、然らば此の血によつて平和を得た信者は何をなすべきか、何をなすが務なるやと考へなければなりません、先づ高められた己の位置の神聖なのを瀆してはなりません、殺滅者の劍は既に己の代に基督を刺したのをたしかに知つたならば其の贖の血の濺れた門の内にあつて靜に神の恩を味ふべきです、

尙疑ふてをらるゝ方があるなれば出埃及記十二章の十三節にある『其血なんぢらが居るところの家にありて汝等のために記號とならん我血を見る時なんぢらを逾越すべし』との神の證言を信じて平和を得らるゝやうに願ます、

第八章

基督の血によれる更生

更生の救に必要なるものは基督も云れた處です、而して或は更生の經驗を有つた者でなければ彼の寶血を受くる事は出來ぬと思ふ人もありましやうが、實際はううでありません、人は更生して聖められ聖靈によつて新にせられて救はれるのですが此等は基督を信すれば自然と豐に注がれる恩です、新に生るゝの必要を考ふる者は必ず自己の極て無能なると基督の血の効力は限なくして神と我儕の間を和け新き心を與ふるものだと云ふ事を悟つて益を受くるに

違ありません、此は聖書に教られた眞理に少しも違りません『神罪を識さる者を我儕の代に罪人となせり是我儕をして彼に在て神の義となることを得しめん爲なり』とあります通り我儕は基督によらなければ神の前に義とせらるゝ事は出來ません、新に生るゝのが必要なりと云ふのは乃ち我儕は唯基督に於る信仰のみによつて救るゝと云ふのを愈明にするのです、約翰福音書の第三章を繙て御覽なさい而して此の極て重要な問題を考て御覽なさい、必ず神の恩を慕ふ念が湧き出で基督の十字架の下にひれふして助を願ふに至りましやう』

基督乃ち肉躰を取て世に顯れたる神の子は『人もし新に生ずば神の國を見ると能はじ』と云はれ更生の必要を吳々も說てをられます、又彼は一層嚴格に『人は水と靈とに由て生ざれば、神の國に入ること能ざるなり』と云はれました、何故之が左樣に必要であるかと云ふに『肉に由て生るゝ者は肉にして靈に由て生るゝ者は靈である』からです、肉とは腐敗した人の性質のことです、人は自然の在の儘では、神の國に入に適當でありませんから變らない中は永久不適當なのです、然し自ら生れ更る事は出來ません、人の性質は全く墮落したものですから根本から精神上の革新を要するのです、人

類全躰から云ふも一個人から云ふも其心は全く穢れ其意志は善に逆ひ良心は腐れ智慧は鈍く情は神を離れて他の値なきものを貴び其願望は卑く其慾は抑る能はず實に憐な有樣です、もし聖靈が新なる性質を與へ心の能力を全く變ずるのでなければ、水が外部の汚物を洗ふ如く心靈の穢を去ることなければ人は永久神の國の民となるに不適當な者です、

基督は肉につけると靈につけるとの二種類の人に就て語られました凡て我儕人類は肉に於て生れたものであるから神の國を見る事さへも出來ないのです、而して『靈により

て生るゝ者は靈なり』と敎らるゝ通り心靈上に再び生れ更らなければ我儕の此の自然の有樣から脫するわけにはゆきません、又我儕は凡て遺傳によつても欠點のあるものですが羅馬書には『肉の事を念ふは神に乖るが故なり是神の律法に服はず又服ふと能ざるに因る而して肉による者は神の心に適ふと能はず』と記してあります、道德を修ると云ふ事は神との關係に於ては何の値もないのです、ニヨデモは道德の高かつたものですが此の世と共に變遷する道德の標準に達するよりは更に深く更に高いものが必要であるのを敎へられました、神の聖義の標準は道德ではなくて

心靈上の完全です、

或は期く嚴格な說を公にすると多の人は宗敎を忌み之を違るだらふと申す人がありますが、然し此の樣に說た爲に神の敎を堪ゆべからざる事に思ふて遠かつたとて之は我儕の過ではなく違る人の過です、諸君は果して『心は萬物よりも僞るものにして甚だ惡し誰か之を知をえんや』との聖書の語を眞と信ぜられますか、實に肉に於ける人は神より寧ろ惡魔によく似寄て居て神を知る事も愛する事も事ふるとも出來ませんたとへ道德の高と云ふ評判の人でも其まゝでは神の聖き國に入る事は出來ません』

然し人は此れ程己れの性質が悪者だと信ずるのは困難で
す聖靈に感じた人でなければ了ません、基督は我儕を肉につ
ける者とし全く墮落してをるやうに申されました、新に生
なければ一人も神の國を見る事も出來ず、之に入る事も出
來ません、道德の堅固な學識のあるニコデモでさへ出來な
いと申されました、又多分出來難からんとは申されず確か
に出來ぬと申されました、之は我儕が墮落してをるゆゑば
かりでなく到着する處が神の國であるからです、無政府主
義の人は立憲的の秩序ある政府を好みません、神の國に
行るゝ法律を好ぬ者は其政治の下にあつて忠良な臣民と

なる事は出來ません、生れつきのまゝなる人を入れて故障
なく神の國に生活せしむると云ふには神が先づ其性質を
變へなければなりません、然し之は出來ない事であるから
其國を見之に入るものは己の性質を其國に適するやうに
變へなければならないのです、忠良な臣民となるには先づ
新に生れなければなりません、新しき者となつてこそ始て其
律法を心に記す事も出來るのです、
又或人が申ました通り人は自然に己の嗜好性質習慣等と
己の居る位置境遇或は己の執る職務とが調和せなければ
幸福なる事の出來ないものです、臆病者が戰場に出された

り放蕩者が會堂に出たり、輕薄な俗人が人の臨終に逢ふたり醉人が眞面目な人の中に入りたりすれば自然と窮屈に感じとても樂などはありません、然らば更生しない人は現世に於て或は來世に於て神の國に入たからとて何の樂い事がありましやう禮拜堂の勤でさへ靈性の發達しない人には忌しく見へます、說敎者が想像を畫き例を取り季候の如何を語り此の世は麗しいとか昔の海はどうで山はどうであつたとか山川草木はどうで日月星辰はどうであるとか申してをる間は其話が了り之を喜びますけれど一層靈の永遠に關る重要な問題になれば蕪を嚙む樣に思ふて之

を拙ひ面白くない說敎だと申ます、然し高尙な靈の話を樂めないのは乃ち我儕が肉についてをつて更生によつて來る靈の情を具へて居ないからです誠に『性來のまゝなる人は神の靈の情を受ず是れかれには愚なる者と見れはなり又之を知ると能はず蓋靈の情は靈によりて辨ふべき者なるが故なり』とある通りです、而して此の更生は我儕自身修て善くなるのではなくて神によつて新にせらるゝのだと云ふのは實に驚くべき眞理ではありませんか、此は基督とニコデモとの問答によつて明白です、基督は『人は水と靈とに由て新に生れざれば神の國に入る事能はざるなり』と申

されました、此の新に生るゝ事は、聖靈が神の道なる生る水を以て成就するもので靈によつて生るゝものは靈なりとある如く靈の性質のものですから外形の改良ではなくて内心の更新です、先づ靈に於て生れ更らなければ外形の生活を新にする事は出來ません、一大變化が内に成る時は必ず外に顯るゝものです、聖き生涯は新に生るゝ事に始るのです、此の經驗を得ないならば何程涙を流して祈り罪と爭ひ神の律法に從ふても徒然であります、

此く云はゝ或は此の如き經驗は到底我が達し得べきものにあらざれば助なき罪人となつて神の前に病み死するより外なしと失望する人もありましやう、然し此は決してうではありません、勿論自己は恢復のならぬ程悪い者故失望するのは當然ですが、敎の精神は基督に歸依せよと云のです、御覽なさゐ基督は此の猶太の宰に向て罪の贖は中保者なる己によつて與へられる事を語り且つ神の愛は其子の賜と事業の中に顯れてをるのを語られました、諸君が新に生れたゐと望まるゝなれば基督は必ず摩西が野に蛇を擧し如く擧げられた人の子を見よと申されましやう、而して之を見るなれば諸君は赦され生命を與へられるのです、諸君は諸君を襲擊する蛇の毒の爲に病で斃んとしても此

の恐るべき毒を解き得ざるのみならず永遠に至るべき新き生命を受る力もなゐと云はるゝなれば基督の言葉を御聞きなさゐ、猶太の宰との談話の中に『うれ神はうの生たまへる獨子を賜ふほどに世の人を愛し給へり此は凡て彼を信する者に亡るとなくして永生を受けしめんが爲なり』と申されました、

神の其子を世に遣したまふたのは世の人の罪を定め其腐敗のまゝで永遠に滅亡してしまふと云ふ爲ではありませんで却て世の人を救し且つ救ふ爲であります、而して救れた者は皆新に生れたと申ますが之は唯腐敗の中に横つて

をつて新しき性質を求め何時か何とかして得らるゝだろうと空しく望でをつて得たのではありません、此を得た者の經驗は皆同樣で神が其の意旨のまゝに眞の道を以て生んだのだと申してをります『我儕は神の道によりて新に生れ』たれば新きものであつて乃ちイエスをキリストと信じて、神に由て生れたものです、是に由て見ると更生は基督に於る信仰から來るものですから之を得たゐと思ふ者は絶へず救の十字架を眺め又天に昇りて神の右に坐したまふ一人の生るものを望で彼によつて古き人と其罪と死とを去りて新なる人となりて義と生命を受くる樣にせなけれ

ばなりません、新に生るとは如何なる事であるかと云ふのを知り神の生命を受て心に充したゐと思ふ人は羅馬書六章と以弗所書二章を御覽なさゐ、よく基督がニコデモに教られた眞理が了りましやう而して此基督と猶太の宰との話を掲てをる福音書全体は唯此事に關する基督の心を顯したものに外ありませんのは其終に著者が『此書を録せるは爾曹をしてイエスの神の子キリストなる事を信せしめ之を信じ其名に因て生命を得させんが爲なり』と申たのを見ても明です、

以上論じた所を以ても尙新に生るゝ事の了解せぬ方があ

るなれば此の基督の問答の全躰をよく味ふて御覽なさい先づ三節より九節まで讀むなれば諸君は己の有樣の憐なのを思出して悲みましやうが決して書を閉て歎くには當りません、進んで十四節より十七節に至るなれば必ず死と其悲より逃るべき基督の備へ給ふた明な恩深き正しき道を發見するでしやう、乃ち基督の供物は完全く、神の愛は類なくして亡ぶべき罪人を恩み基督を信ずる者は喜で之を救ひ永生を與へ給ふのが分ります『神の子をもつ者は生を有つ子を有ざる者は生を有ず』と云ふのは眞理であります、

第九章

基督の血を信ずるは救に必要なり

我儕が神の恩を受くるのは其恩と基督の事業に關する神の証言を信ずるからです而して証言を信ずるのと其証言中にある人を信用するのとは離すべからざる事ですから神の証言を信ずるのは神自身を信じ又其子イエスキリストを信ずる事になるのです、之が聖書中に信仰が我儕を救ふと云ふてある所で實に神の性質は恩深い故其重荷を彼の手に委る時は如何に重くあつても彼は必ず助け給ふと敎てあります、又我儕は神と基督を知るに由て救ると敎て

あります、此知ると云ふのは神が自を世に示した樣に知る事なのです『永生とは唯獨の眞の神なる爾と其遣しゝイエスキリストをしる是なり』と申てあります、又パウロは基督の死して葬られ又甦りし事を揭て『爾曹もし我傳へし言を固く守り徒に信ずる事なくば之に由て救れん』と申ました、我儕が基督によつて永生を得るは彼を知り彼に聞き彼を信るからです、證言は證されたる人と密なる關係があります、すから、證言を信ずるは乃證された人を信ずると同一です其故人の靈魂は神の恩と基督に賴て救れると云ふ眞理を信ずる信仰は我儕と基督を結合するものです、夫ですから

信仰と云ふても基督を認ない信仰は何の値もありません、基督を認るのは乃彼に就て教られた眞理を認むる事です、故に信仰は罪人と神の赦と生命の賜の間を結ぶ力＝＝唯一の力であります、世の罪を負ひ給ふ神の羔を信ずれば永生の恩を給ふとの通知を聞て之を神の眞實なる言葉なりと信ずるものは信仰で、決して信仰と他の心の能力との作用ではありません、

我は信仰が出來ないからとて拒む人は甚だ誤てをります、之はまだ信仰とは自らなすべき働であつて、他人のなした働を承認するのは信仰ではないと思ふてをるのです又或

は平和を得るには何事か成さねばならず而して此の信仰と云ふ一大事を成就したら神は報酬として平和を與へられるだらふと思てをるのです、兎角信仰を以て罪人が平和を買ん爲に手に持つてをる代價のやうに考へて既に他人の買ふて呉れた平和を受取る爲に手を延る事だとは思いません、夫故自分の知る知らぬにかゝはらず信仰自身に何か利益のあるやうに思ふのは誤で此樣に思ふてをる間はとても平和は得られません、信仰は決して働ではありません、反て働を止る事です、自身で山の巓に登らふとして勉るのではなく之を止て基督の手にすがつて導かるゝまゝに

するのです、或は己を救ふのは己の信仰で其信仰の目的者ではないと思いましやうが、信仰を置く者がなければ如何によき信仰でも何も得る所はありますまい、且つ此の樣な誤よりして信仰とは大切な働である、何をなさば信仰に適ふか又如何に働かばよろしからんかと考て心を痛る樣になります、之は實に悲むべき誤で平和は信仰の働を適當に行ふによつて得らるゝものと思ひ、神が我撰しものを見よ他の事は皆忘れ己も己の信仰も悔改も感情も、皆忘れて彼を見よと云ふて指るゝものにまかせないのです、救は基督より來り決して人間の弱き信仰の働より來るものではあ

りません、平和も彼より來り人間自身の信仰の働より來るものではありません、

此の樣に信仰の意味と信仰が人を救ふ方法を誤解すれば遂には平和を得る道を全く誤るに至ります、先づ第一多の人の六ヶ敷がる不信仰と云ふ事を考て見ましやう、不信仰は通常人の考る通り信仰と云ふ大な行を正しく成す事が出來ないと云ふのではなくて反て、行を成就して自ら義とならふと云ふ企や己の行によつて救れんと欲する願を棄る事の出來ないのが不信仰であります、言葉を換れば神の子の十字架の効績は人が自ら義となる爲に何事か成就し

やうと務むる樣な誤た望なき企を止さする程に充分で大なものだと云ふのを知らないのです、人もし聖靈によつて此大なる供物の功德を悟る時は直に自ら救を成ふなどと云ふ考を止て基督の成し給ふた所のものを受容るに違ありません、聖靈の一の大なる務は人を助て救を得る爲に何か成就せしむると云ふよりは寧ろ己の働をすてゝ基督が死して甦り而して成就し給ふた救を以て滿足する樣に敎るものです、

然し或は我が信仰には滿足が出來ぬと申す人もありましやう之は左樣で御坐りましやう然し何時になれば滿足が

出來ましやう、平和の得らるゝ程滿足な信仰を有ちたいと云ふなら或は一生待ても得られないかも知れません、聖書には『我儕信仰によりて義とせられたれば神と和ぐことを得たりとは我主イエスキリストに賴てなり』と記してありますが、我儕は我儕の信仰を以て滿足するに至り神に和ぐ事を得たりとは記してありません、神は我儕が自の信仰で救れやうとせす基督と其働に滿足して任すのを望まれます、是は尤も眞なる種類の信仰です、基督を以て滿足するのは乃基督を信仰するのです、彼の血を以て滿足するのは彼の血を信仰するのです、此の信仰あれば其上何が必要であ

りましやう、何程信仰々々と云ふても信仰は基督の與へないものを與へる事は出來ません、又基督は恩を受くるに適當な或る種類の信仰を起すまで恩を與へないと申さるのでありましやうか否決して左樣ではありません、信仰は恩を買ふ代價である功德であるなどと思ふてはいけません、基督を以て滿足すると云ふのは信仰の實質ではありませんか、もし基督と其事業を以て滿足してをるなれば決して己の信仰に就て迷ふには及ません、唯眞の平和を與る者を知る事の出來るのを喜で進むべきであります、諸君は己の信仰を以て滿足しないと云るゝなれば其は當

然の事です、もし滿足されたなれば道を遠る事遙なるものです、聖書の何處を見ても己の信仰を以て滿足すれば平和を得ると敎てはありません、却て飽迄己に不滿足にて己の信仰も又凡て己につける事には不滿足にて唯基督のみを以て滿足してをらなければならないと敎へてあるではありませんか、基督を以て滿足してをれば安全です、彼を以て滿足しても平和を得ないと云ふなれば天地間にあるものは何も平和を與ふる事は出來ません、假令己の信仰は何程完全であつても自ら罪を赦し生命を與ふる事は出來ません、又其心を安め恐懼を去る事は出來ません、信仰の指す處

は基督です、其聲は基督を見よと云ふのです、其目的は人をして己を去りて基督を見、之を見て滿足し、滿足して平和を得て喜ぶに至らしめんとするのです、

第十章

基督の血は信者の生命と平和なり

是よりは未信者の方に話すのを止て少しく其責任と義務を深く感じて居らるゝ信者の方々に御話し致しましやう、

吾人は世界の歴史上で尤も重要な時代に遭遇してをる者です、世界の國々は實に悲むべき憂ふべき有樣に陷てをるではありませんか、互に武力を張て相對し時としては血の雨を降すに至ります、人は己の慾を充さん爲に勉め成功致してをります、特に怪むべきは世界の國々が更生を願ふ聲の盛なると共に一方には世の敎界が一層靈の力を得るや

うに復興せねばならぬと叫ぶ聲の高ひ事です、

吾人は肉につける勢力の盛なるを見ればどうしても基督の爲に奮起せずには居られません、然し唯此を以て奮起する動機とするなれば吾人の熱心も亦外形に過きないので す、傳道の働も世の事業の盛なるに習ひ或は之を凌駕せんとする如き望から出て基督に於る眞の信仰と神との直接の交際から出たのでなければ唯外部を飾る肉の事業に優れた所はありません、

然し今や聖靈大に地上に臨みたまはんとするのを信ずべき理由が充分あります、種々なる教派の中に散してをつた

生る神の教會は此の力を感じて來ました、宗教上の運動に活氣が加り、人靈の救濟に益熱心なる人の多きを見ても聖靈の恩ある感化力を知る事が出來ます、吾人は此神恩を感謝し今日多事の時に際し丈夫の如く淋漓たる勇氣を奮て神の爲に此の大事業に當らなければなりません、然し吾人は先づ有要なる働人となる前に充分の用意をせなければなりません、乃ち『願ふは其靈を以て爾曹の衷の人を剛健にし又キリストをして信仰によりて爾曹の心に居しめ、また爾曹をして愛に根し愛を基として諸の聖徒と偕に測るべからざる基督の愛を知りうの濶さ長さ深さ高さを識らし

め又すべて神に滿るものを爾曹に滿しめ給はんと』です、吾人もし神の恩を以て滿され新なる靈を受くるなれば其上絶へず悔改の時に得たる根本の眞理を深く考へ味ふべきです、基督を望むは吾人の働を新にする力であり、カルバリの十字架は靈の復活を來す尤も近き道であります、ヘウイソンと申す人が臨終の折に一人の友人は病床の傍に來り彼を慰る積で神の盛德を云ひ表した聖書の句を讀で聞かせました、然るにヘウイソンは其友の去た後に此等の聖句は『ろれ神はろの生たまへる獨子を賜はゞに世の人を愛したまへり此は凡て彼を信する者に亡ることなくして永

生を受しめんが爲なり』とか『己の子を惜ずして、我儕衆の爲に之を付せる者は豈かれに併て萬物をも我儕に賜ざらん乎』と云ふ聖言程慰を與へない、唯の約束よりは神の愛心を示す言は遙に力あるなり、我は生る神と交りたしと申されました之はかゝる場合には有勝な經驗です、大概敬虔なる信者が死に近く時は唯神の福音の單純なる眞理と生る神の子の靈とによつて安心するものです、且つ吾人の靈の衰た時『我靈魂は患難にてみち我がいのちは陰府にちかづけり』なゞと感ずる時は基督の福音の根本の眞理程我儕に力を與へて奮起せしむるものはありません、『キリストイエス

罪人を救はんために世に臨れり信ずべく亦疑はずして納べき話なり罪人のうち我は首なり』との正直な言葉は實に信者の同情をよび失望の淵に沈める罪人の爲に已の身を献げしむる力のあるものです、福音は『ユダヤ人を始めギリシヤ人すべて信ずる者を救んとの神の大能』であります、過去の罪に對して難む心を慰め現今の有樣につきて憂ふる心を勵し將來の望につきて心を平ならしむるものは唯基督ばかりです、此は理論ではありません凡て神の子等の知る如く經驗し得らるゝ事です、

或人の言に次の如く申してあります、『我は基督の生る靈と

交るより善き事なし、信仰ケ條や教理や義務の要求に應んと望むはよき事なれど健全なる眞の信者と爲んにはたゝず我儕の罪を負ふ爲に我儕と同し形をとりたまふた眞の祭司長を望まなければならない、もし堅く基督を見つめてをるなれば決して世の笑や嘲に心配はいりません、たとへ何程我身を顧ても我衷には幸福を來すべきものゝ無のを知てをつても尚屢我に依るは免れぬ事ですが眞に滿足の出來るのは基督を以て我が救として之を望でをる時です其時は死も尚恐るゝに足らないと思ます、』

コルクオーム夫人は基督を以て平和、慰、救となす貴き經驗

を得た人ですが其經驗を以てよく他人を敎る事が出來ました次に掲るのは或る若い友人に送られた手紙の一節です、

冬の寒き時も夏の暑き時も我儕の基礎は變り申さず候基督は充ち足れるものにて彼には變化なく變化の影さへも無之候此は尊き眞理に候へば之を以て我儕の立場となし我儕は望を永劫不變の者に繫ぎ候事肝要に候へば我儕の衷にある僅のものに頼るは不都合に御坐候我儕は時々刻々變化すれども基督は永遠に聖くして變る事無之候而して此完全なる者が天の裁判の時に當て我

儕の代理をせらるゝとの事に候何事か之に增したる幸か候はん決して我儕の德を積て我儕の無罪となる理由を確むべしなどと可申事には御坐なく候然るに間違て我德を以て立んとすれば元より皆無なる德を尋るなれば其搜索に疲れ果て柳の枝にかゝりたる琴の彈ずるに由なき如に可有之候然し全く私を棄て我儕の義なる主を望む時は再びシオンの歌を唱ひ得べくと存候貴君は果して常に主に在て喜び給ふやよし未だなれば儀式や感情によつて生活せらるゝは尤も然るべからずと存候如何となれば感情による慰は感情と共に消長するなれ

ば遂には神に近きて慰を得、宗教上の勤を行ふて喜を得た時も自ら一定せぬ様に相成るべくと存候且つ之は十字架に懸し基督乃我儕の義なる基督に於て樂む喜とは大に異りをり候又基督は遠く在す様に思ひ所の念も薄き可申と存候然し我儕は堅く基督に在て喜び彼によつて全く成りうるを信すべき事と存候

多の眞の信者が疑や恐を以て苦むのは重に己の靈魂の安危を全く救主に任せず半分は自身の經驗で負ふとするからです、聖靈の恩によつて我儕の中に結ぶ義の果は元より貴きものですが未だ我儕の救の基とするには足りません、

レー、リッチモンドが其母に贈た手紙に左の事があります、

時々御疑や恐の起り候は信仰と悔改を救の証とせられず此等を救の基となされ候によると存申候我儕は能信仰を行ひ悔改をなすに由て救るゝには無之、我儕の信ずる基督が萬事をよく行れたるによりて救るゝに御坐候信者は自身の不德を感すると同時に救主の盛德を認候程喜しき事は無之候或は母上様には御身を顧らるゝ事余り多くして無限の價を拂ふて我儕を救んとする者を望るゝ事余り少く候かと存せられ候罪を悟る爲には已を顧るべきなれど慰を得んには救主を望ねばならぬ事

と存候彼のイスラエル人は銅の蛇を望て癒され候聖靈の恩は他人をして我儕の基督に在るを知らしむるには必要に候へ共我儕の心に平和を得るには基督を受容て彼を信じ愛して從ふより外に道なく候彼を望めば我儕は聖く相成り我儕の罪を嘆き達すべき目的の遠を嘆く事愈切なれば我儕の聖くなるも愈深く相成候と存候我儕の聖とせらるゝは漸を以て成る事にて未だ完成致さず候へ共我儕の義は完く成就致しをり候聖は我儕の裏に成るべきものにて義は我儕の爲になされたるものに候願くは唯値なき罪人として基督に歸依なさるやう願

上候さすれば義とせられ罪は赦され受容られて闔とせらるべく候へば之より感恩の情も献身の心も起るべく と存候此の如く救は唯信仰によつて來り信仰は愛に由て働くものに御坐候此等の道理をよく充分に御味ひ被下候はゝ必ず眞の福音の敎に適ふ平和と罪の赦と慰を御會得なさるべくと存上候

第十壹章

基督の血を信るは成聖の基なり

罪人の義とせらるるのは基督を信するによる事を主張するパウロが常に信仰によれる義と聖き生涯とは深き關係あり、新しき生涯は教の眞理を堅く信ずるやうに申てをるのは實に著しい事です、彼がテトスに送た書翰には我儕の主イエスキリストの恩によりて義とせられ永生の望に從ふて嗣とせらるゝ事を說き后に信者は絶ず善を行ん爲には只恩によつて救るゝと云ふ教を堅く信せなければならないと諭しました、又律法の行によらず基督に於ける信仰

によつて義とせらるゝ道より外に善事はなしとも申してをります、眞正の善事は我儕が救れてをるからなすので救るゝ爲になすものではありません、而して多の罪赦された りとの感情が強ければ愛心も深くなり自然と實行に顯るゝものです、且つ我儕は基督と全く連絡を通し親く交りで我儕は受け入れられるであらふか否やなどの疑を容るゝ餘地のなゐやうにならなければなりませんパウロの如く神に事んとするものはパウロの信仰を有ちパウロと同き經驗を持たなければなりません、彼の信仰の有樣は『我キリストと偕に十字架に釘られたり既われ生けるに非ずキリ

スト我に在て生るなり今我肉体に在て生るは我を愛して我が爲に己を捨しものすなはち神の子を信ずるに由て生るなり』との句に顯れてをります、我儕は神の愛を深く悟らなければ神の聖が如く聖くならん我此事を勉むと大膽には申されません、古人の言に眞の信仰は人を聖め且慰むる力あるものなりとあります、又眞の信者は義とせらるゝと聖とせらるゝとは別の事で罪の赦と聖潔とは關係のなゐものだとは思ひません、其基督に來て罪の赦を求るのは罪の汚を去るばかりでなく罪の支配を脱したゐと云ふ爲で決して神は罪を赦し給ふからよゐと云ふて更に罪を犯ふ

とするのではありません、罪に汚れてをる眞心を清むる基督の血は死せる行を以て生る神に事へやうとする樣な誤た心をも清むるに違ひありません、夫故義とせらるゝのみならず併て聖とせらるゝのを望なければ基督に來ても眞の信仰とは申されません、又之を望なゐものは聖なる神の恩を受け其交を樂む事は出來ません、眞の信者は基督によつて唯幸になるばかりでなく聖くなるのを望みますから其德を受て罪を亡し、其力に勵されて勤を行ふやうになるのを望むのです罪を遠ざからせなゐ信仰はとても地獄に陷るのを救ふ譯にはゆきません、又人をして其義務に忠實

ならせる事の出來なゐ信仰は矢張其人を導て天に至らしむる事は出來ません義を得させる信仰は聖を受けしむる恩です聖むる力は義をなす事は出來ませんが義とする力は聖むる力を有てをります、輝く太陽は熱を有てをりますが輝くものは其熱でなくて光です、其の通り人を義とする信仰は愛と聖とを有てをりますが、愛と聖とか人を義とするのではありません、之をなすは唯信仰です、

神の善を信せず基督の惠を望ぬ者はどうして聖くなる事が出來ましやう、此の望のあるものでなければ神の聖さが如く自を潔くする事は出來ません、基督によつて來る神の

恩を信じ我儕の心の尤も慰られ尤も寛大になつてをる時は尤も勵で勤を行ひますが之に反して神に對する信仰を失ひ頑固なる心を抱く時は義務も勤も行ふ氣にならぬと云ふは古來多數の人の經驗する所でありまして、如何にも基督に由て神の愛を信ずる事と聖とせられるのと靈の慰を得るのとは密接な關係があります、充分なる信仰と眞の心を以て神に近寄なければ『心の惡念を灑れ清き水をもて身を洗れる』事は出來ません、

神に來つて罪の赦を求め困難な時には助を求るやうになつた我儕の信仰の基礎は基督の血でありますが、凡て必要

なる靈の恩を求むるにも之によつて神に來らなければなりません、又た我儕の靈を復興せしめ又は聖靈の働によつて數百萬の人の悔改むるやうになるのを望むなれば其願は唯基督の名によつて求めなければなりません、或人の申します、眞の祈は尤も重を基督の血に置くものであります、之をゆるかせにすれば其祈は力を欠き靈の性質を欠きます、贖の血を認ず其助を求めない祈は必ず力の欠てをるものです、基督の血は神に至る新き生命ある道にして全能者を動すべき力であり又人を至聖所に導くべき力であります、之をおろかにして之を輕じ凡の祈願の基とし

ない祈は何程言語が立派で流暢で思想が麗しくあつても何の益もありません、我儕の祈には之が輕せられてをりますまいか、エムマヌエルの贖の血は充分重られてをりましやうか、禮拜堂に於ても講壇に於ても社會全体に於ても之を聞く事は誠に少ないのは悲むべき事です、然し之を重ずる精神がなければ祈も祈にはなりません基督の血の香を以て上りゆく祈禱でなければ神に受容られません、祈の應へられるのは唯基督の血によるからです、彼の血は義を滿し律法の要求を充すものですから靈魂の爲に求むるものを悉く與ふる樣にするのです、又之は基督の最后の意志を

世に成さしめんとする力で我儕をして大膽に神の前に出しむる力です、憐なる罪人は之によらずしてどうして神に近けましやう、基督の血を手に持て居なければどうして神を眺め之に願を捧る事が出來ましやう、否どうして聖なる神の前に出る事が出來ましやう、基督なければ神と我儕の間には平和な關係はありません、全く道は塞げられ凡の恩はとじられます、神は自ら其愛子を愛て冕を與られ又我等が主として冕を献くるのを望れます、而して彼の全き義を以て我儕が神に受容らるゝ基となし其血を以て神の賜ふ凡ての恩を請求する道とすると云ふより更に美しき冕を

献ける事は出來ないと思ます、或は己の余り悪く汚れてをるを思ひ又は信仰を失ひ神の傍を離れ所禱の精神を失つた時に元の如くなりたいと望でも如何にして神に求めたらよからんかと躊躇する人もありましやう、然し基督によれば凡の恐を去つて祈る事が出來ます、基督の血は之に頼り來る者を求てをります、神に立歸るものを喜で助けます彼は實に罪を犯すものを神にとりなす保惠師です、又諸君が世の滅亡に至るべき靈魂を見て之を憐むの情に堪へず、彼を救ひ神の事業を盛にしやうとの望を抱かるゝなれば、必ず基督の名によつて企てられなければなりません、うう

しなければ必ず成功致しますまい基督は爾曹もし我にをりまた我言し言なんぢらに居ば凡て欲ふところ求に從ひて予らるべし』と約束せられました、さらばもし神の事業は停滯し亡に至るべき靈魂は警醒しないと云ふなれば是或は我儕が基督の血によつて求めないと云ふ罪を明すのでありましやう、基督の血は實に貴いけれど決して遠慮して使ふには當りません、之を我儕が神に頼る唯一の道として充分に頼り神は果して之によつて來るものゝ祈を聞き給ふて惠を與へらるゝか否試てみるのが大切です、

第十二章

基督の血は福音の要素なり

我儕が今日尤も必要と思ふ所は教理の復興であります、レバイバルの說教でも祈禱會でもありません、其教理と云ふのも神の子イエスキリストにつける福音です、言を換て言へは基督の寶血の完全にして充分なる功德を表す聖靈の証明が必要なのです、レバイバルは多くの信者が神の恩の福音の重なる教理を充分に熱心に明言する事だとするなれば此道理が分りましやう、眞正のレバイバルは只レバイバルを說くから起るのではなくて『キリストも一次罪に因

りて苦を受く義者不義者の爲にせり是われらを引て神に至らんとてなり彼ろの肉体は殺れ其靈は生されたり』と云ふ樣な聖靈が常に證しする尤も大切な教理を絶す表明するからして起るのであります、聖き靈性上のレバイバルを起す人は必ず『第一聖書に應てキリスト我儕の罪の爲に死しまた聖書に應て葬られ第三日に甦れり』との三箇の重大なる教を説く人であります又傳道者の中にも或人は傳道の始に成功しても直ぐ力なきやうになり或人は之に反して始終變らなゐと云ふ樣な經驗のあるのは甲は重に基督を述るのを第二として説教を作る事のみに離れ乙は之

に反して基督を以てアルパとしオメガとするからであります、願くは凡ての傳道者が一年の中少くとも數月の間彼等が傳道の初に説て成功した教理を思ひ返して述るやうにしたゐものです、彼等もし馬太傳十一章二十八節約翰傳三章十六節羅馬書一章十六節、哥林多前書二章二節の如き句を題として熟考し讀書によりて得たる處直覺的に悟りし處又は實際の經驗に照して之を解説し、聖靈と熱心なる信仰により不信者の早く悔改せん事を願ふて説教するなれば必ず大なる宗教の復興が起つて數千萬の人靈は主の下に來る樣になりましやう、

我儕は聖靈自ら示したやうに福音の眞理を說くのは大切で御坐ります神の眞理を示したまふ順序を變するのは眞理を拒むと異ならぬのですから基督の事業と聖靈の事業を正しき事として信するのみならず聖書に示されし通に信せなければなりません、其子イエスキリストの血は凡て我等を罪より潔むとの敎は實に神の默示の全體に光を放つ大陽の如きものです、基督の血による贖は基督敎の本體です、罪人は之によるより外に和ぐ事は出來ません、

ウエスターミンスター會議で定た敎會問答大要には前に論じた眞理が明に示してあります、神は我儕が罪の爲に將

に受くべき怒と詛より免れん爲に何をなさせんとし給ふやとの問に對し、神は我儕をして基督を信じ悔改て生命に至らしめ云々との答があります、此の問答の作者は此の重大なる聖書の眞理をよく理解し正しく言ひ表したものです、先づ罪によつて將に受くべき怒と咀を免れん爲に何をなすべきやと尋る者に何と答へましたらう、基督を信する前に聖靈を所り其心を更へ不潔なる心を潔くせよと答へましたらうか、否決してさうではありません、先づ主イエスキリストを信じて救れよと申しました、之を後の問答で神學的に敎理を說明した處で信仰によつて義とせらるゝ前

に神の靈に導れなければならぬと云ふてあるのに較て見ると特更に此の敎の大切なのが分ります、後のは悔改を受た信者を敎るもので始のは救を受くるには何をせばよろしからんと思ふてをる人に對する敎であるから悔改て生命に至る前に基督を信せよと申されたのです、救に至る信仰を生じ之を働すには聖靈は必要なれども始て道を求る罪人には聖靈を說かず基督に依らしむべきものです、心の變化を求めさせないで先づ神との關係の變化を求めさせ義とせられて后に聖き心を得るやうにさせなければなりません、聖き心は必ず義とせられてから來るものです、

懺悔とは適切に言へば心の變化乃ち神についての新き心であります、更生とは情の變化で神に對する新しき情です、悔改は生命の變化で神の爲に新き生命を送る事です、嗣とせらるゝのは家族の關係の變化で神との關係が新になるのです、聖とせられるのは事業の變化で萬事を神に献する事です、榮光を受くるとは場處の變化で神と共なる新き有樣に入る事です、然し義とせらるゝとは神の前に新き者となつて立ち得ることです、己の救を熱心に求る人には先づ此の義とせらるゝのを敎へなければなりません、如何となれば神の愛し給ふ者によつて受容られるのは萬事の基であ

るからです猶適切に云へば是が遂には花を開き實を結ふに至るべき貴き種です、夫故求道者には此の理を明に示し『人の義とせらるゝは律法の行に由にあらず唯イエスキリストを信するに由るなるを常に心得させるやうにせなければなりません、

此く述へ來れば私は今神學上の議論をしてをるのではなく、實際求道者が要する道を示してをるのが分りましやう、もし神學上の意見を述ると云はるゝなれば羅馬書十一章三十六節にある『萬物は彼より出でかれに倚かれに歸れば なり』との說をとるのです、然し今は罪人が榮光の位に對す

るではなく恩の坐に對してをる時の覺悟を說のですから神學ではなく實際に救に必要な問題を解釋しやうと思ふのです、又今は神の性質について說を立るのではなく、熱心に救を求る人は如何なる敎によれば心の平和を得られるかと云ふのを示すのです、而して私は此の大切な目的を達するには唯基督に賴れと申ますが基督は十字架の血を以て平和をなされましたから實に我儕の平和です、又其平和は遠き者にも近き者にも傳られて限なき福音となりました」神の權威を充分に認るには第一にキリストの賜る平安をして其心を主らせなければなりません、如何に堅固に儕師

箇條を奉じてもキリストの平安を受けない間は不足を感ず、又神の榮光と其性質を知らふとするものは先ず基督の中に顯れた榮を認めなければなりません。『道肉体となりて我傍の裏に住ひ恩と眞理に充てり』と申まする通り基督の救主なるのを知らない人は神の榮光と權威を知る事は出來ません。

第十三章

基督の血に關する聖靈の證明

聖靈の務むべき大なる事業は基督を罪人に示し彼に歸依して救を得させるやうにする事です、夫故罪人に罪の赦を得救を得る爲には唯基督に來れと敎ゆる點に於ては今日道を傳るものは聖靈と同じ事業をしてをるのです、己の罪に氣の付た罪人が聖靈を求て力を得、智慧の眼を開き基督の充ちたれるを悟り得る樣にしたいと望むのは聖書の敎に適てをるか否と云ふのは只今論やうとする問題ではありません、又聖靈の働は救を來すに必要であるか否

と云ふのも問題ではありません、既に前に論した所によつて我儕に聖靈を以て靈魂の新に生れ悔改むる爲に必要なりとするのがよく了りましやう、

夫故今究めやうとする所は罪に氣が付き心配してをる罪人には何を語つたらよからふかと云ふ事です彼の異教人の使徒なるパウロがピリピの獄吏に云ふたやうに『主イエスキリストを信せよ然らば救るべし』と申ましやうか、或は第一に其人を勸て尙深く罪を悟り其智識を明にして頑固なる心を和げ主基督を信じ得る爲に聖靈の助を求むと申ましやうか、又は第一大切なる事は神と和ぎ得る基は基督

の血であるから是を受る事だと敎へましやうか、或は義とせらるには基督の働のみならず聖靈も必要だと敎へましやうか、もし第一の說の通りにすれば唯信仰によつて義とせらるゝと云ふ事になるので宗敎革命以來の新敎の敎理です、第二は聖められて始て義とせらるゝと云ふので有害なる異端の說です、此說を奉するものはたとへ一生涯宗敎の經驗を積み熱心に忠實に其務を盡したからとても到底滿足に罪の赦を得た証を得る事は出來ません、之に反して只基督の血を以て救の基とするなれば基督が信仰の目的であり又神と和ぐ基であるのを信ずる故ピリピの獄吏の

如く其全家族と共に神を信じて喜ぶ事が出來ます、然し多數の信者の中には誤た考を抱き基督は定れる時に來り苦を受て天に擧げられたれば聖靈が其代に救主として送られたのであるから今日人の救るゝと救れざるとは全く聖靈の働による事で基督の働ではないと思ふ人があります、が實に嘆くべき事です、聖靈は基督が救主であつて今も天に在し給ふのを証するので決して救主なるイエスの代理ではありません、只イエスの証人で人は基督に於る信仰によつて神の子となり得ると云ふ事を証するものです、之はペンテコステの日の働に於て明であります、彼の時

には數千の人が其証を信じて基督の名を信じ罪を救されました聖靈は救主ではありません、又救主であると云ふた事もありません、其働は罪人を導て基督に至らせ彼に任させるのであります、基督は聖靈について弟子に『かれすなはち眞理の靈の來らん時爾曹を導きて凡の眞理を知しむべし』蓋彼已に由て語るにあらず其聞し所の事を爾曹に言また來らんとする事を爾曹に示すべければなり彼我榮を顯さん蓋我屬を受て爾曹に示せばなり』と申しました、此の如く基督を証し且榮ひるのが聖靈の重なる目的であり重なる働であるとするなれば彼を信ずる者特に傳道者たる者

は矢張之を以て重なる目的重なる働とせなければなりませんの

聖書にある聖靈の証言は皆基督の榮光を示すものです、從て傳道は此等の聖書の教を絶ず罪人に示して神と和かしむるのであります、聖靈は徹頭徹尾基督の事業の充分にして無限の功德のあるのを証てをります、彼を信ずる罪人は凡のものより義とせられ功なくして義とせらるゝ者を敎てをります、而して我儕は聖靈の助によつて義者となつてから義とせらるゝではなく全く罪人汚れたる者であるなから義とせらるゝのです、聖靈によつて心を正ふせられて

から義とせらるゝと云ふは罪の人淪亡の子の敎であります然し悲むべき事には自ら新敎の信者と云ふてをる人でも之を信じてをる者がありますす、否之は人が自然の情に於て唱ふる所のものです、大概人は先づ力を盡して己を改良し更に善人となり、一層聖くなり生活も行も改まれば神は恩を給ふならんと思ます、然し眞の敎は「視よ神は我が救なり」と敎るのであります、何か神の恩に報ひたゐと云ふのは人間自然の情ですから基督の成就もたる事業に頼り只信仰のみを以て義とせらるゝと云ふのは中々悟り難のです、然し神の恩は人よりも聰くありますから我儕は聖くなら

なれば神と和ぐ事が出來なると云ふ説を探らずに十字架に懸た基督を信ずるのです、義とせらるゝにも聖とせらるゝにもイエスキリストの外に頼るべきものはなゐと思ます、而して他人は如何なる事を申しても私はパウロと共に『イエスキリストと彼の十字架に釘られし事の外は爾曹の中に在て何をも知るまじ』と申ろうと思ます　（完）

教文館發賣養信書類

●ムーデー氏格言及奇談　やじり
ムーデー氏の實際的、教訓的の短篇數十を集めたるものにて數葉の美麗なる木版幷びに寫眞版を挿入せり
ソッドマン、藪内敬之助合譯　定價十八錢　郵税四錢

●幸福之生涯
本書は生涯之部、困難之部、結果之部の三に分ち諄々として基督教の實際的眞理を説きたるものにて同情と熱愛の調子、始終一の如く、苦悶疲勞を覺ゆるの人本書を讀まば豁然として幸福の生涯の秘訣を知らん
スミス夫人著　山鹿旗之進譯　定價三十錢　郵税六錢

●基督信徒之經驗
本書は篤信敬虔なる古今の聖徒十六人の高尚なる經驗を集めたるものなり
山田寅之助編輯　定價十錢　郵税四錢

●焔之舌
アーサー著　工藤陽太郎譯　定價三十二錢　郵税八錢

今日の傳道は初代の高潔熱心なりし傳道者の有様に立ち遅らざるべからず。而して本書實に此希望ある人を助くるに足る。著者曰く本書は予自身の生活及教職と初代基督教徒の間に存すると思はるゝ間隔を減少せんとの希望を以て始められたる默想の結果なりと。

●信仰之栞

キーン著　フルカーソン二階堂合譯
定價十錢　郵税四錢

監督マヲリヲ氏此譯本に序して曰く、此小册子信仰の栞は我々をして有益なる幸福の生活に基き、世を去て天に到る樂しき行路の秘密に入らしむべし余は日本の讀者の爲に神が此書を説し給はんことを祈る

●聖靈之賜物

キーン著　フルカーソン譯
定價金拾五錢　郵税四錢

前書を讀みたる人は亦本書を讀まざるべからず。是れ實に前書と一對の眞書なればなり

●聖靈の辯

ゴルドン著　タフト譯
定價十二錢　郵税二錢

博士ゴルドン夢に基督會堂に入り來りしと見て、之れより説き起せし氏の所感なり。今日の基督教徒を打醒醒する好文字なり。

●レバイバル

ドーエ編　山田寅之助譯
定價拾五錢　郵税四錢

テーロル、ハントレス、ドーエ、フインチー、カイラル、ブロクス、スポルジョン、ジョンホール、マクイルバン、ナップ、スプラック、ヒユース、モーレー、ゲーデル、バルンス等諸大家の靈活なる演説を集めたるものなり。

●四人の人

ストーカル若　田中滝譯
定價貳拾錢　郵税四錢

四人の人、誘惑、良心、今日の宗教、基督と人慾、公共心、宗教の證據、青年と老年の八題を載す。暢達明晰、青年必讀の好書なり。

●密室の祈禱と聖書の研究

ジョン、アル、モット述
定價五錢　郵税二錢

是れ最さに我日本に來遊せられたる青年會のモット氏が歴諸方に演説せられて、洽く靈雨を降らせし最も實際的の好書なり。

* * * * * * *

此他尚ほ之と其類を同ふせる許多の有益なるトラクトあり

明治三十年六月二十三日印刷
明治三十年六月二十五日發行

定價金十八錢

發行者　東京市京橋區銀座四丁目二番地　堀田達治

印刷者　東京市芝區宮本町二十九番地　石崎安藏

發行所　東京市京橋區銀座四丁目二番地　敎文館

印刷所　東京市芝區宮本町二十九番地　共益商社印刷部